

---

# 偽りの行方

彩杉 厚智

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偽りの行方

### 【Nコード】

N6253Q

### 【作者名】

彩杉 厚智

### 【あらすじ】

突然上司の桜井から娘（真理）との結婚を条件に異例の出世を約束される浩幸。会ってみると真理は浩幸の初恋の相手である中学生の時の音楽教師である石川先生と瓜二つだった。浩幸は一目で真理のことを好きになる。仕事も順調に進み出し、友達以上恋人未満の関係だった瑠香とも都合のよい関係を続けられそうですべてがうまく運んでいる浩幸だったが、真理の母親の姿を見た瞬間何かが少しずつおかしくなっていた。

ベッドに身を起こし、ぼんやり壁を見つめながら村瀬浩幸はくわえた煙草に火を点した。

男と女が互いの肌の温もりを求め合うためだけに用意された部屋にふさわしく相手のシルエツトが分かる程度に抑えられた橙色の柔らかな照明が事が済んだ後の気だるい身体には心地よかった。腹の底から煙を吐き出すと何ともいえない贅沢な時間を味わっているように浩幸は満ち足りた気分だった。

「なあ」

呼びかけても隣でこちらに背を向けて横たわっている紺野瑠香はびくりとも反応しない。それは見慣れた情景だった。瑠香はいつもこうなのだ。彼女は眠っているのではない。かと言って起きているのでもないらしい。意識はあるのだが何も考えられない状態。浩幸の声が聞こえていないわけではないが、自分が話しかけられているという感覚が欠如していると瑠香は言う。夢と現実の間に存在する不安定な緩衝地帯に漂っている浮遊感が言葉にならないほど心地が良いらしい。髪一本動かさずにまどろみのバランスを保ち続ける彼女はたとえこの部屋に強盗が押し入ってこようがこの部屋が火に包まれようが身動きひとつすることはないように見える。

薄暗がりの中でも毛布から出ている瑠香の華奢な裸の肩は鮮明に白く瑞々しく、その肌理の細やかさは浩幸に先ほど這わせた唇に伝わった柔らかい感触と仄かに匂いたった女の香りを思い出させる。

「瑠香。そろそろ起きろよ」

幾度呼べども相手は糸の切れた操り人形のように動かない。

浩幸にしても瑠香の至福のときを無下に邪魔しようとする気持ちはなかった。しかし二人が果ててから今まで優に一時間浩幸も話しかけるのを我慢していたのだ。そろそろ彼女も快樂の余韻から現実の世界に戻ってきてきてもいい頃ではないか。

もう一度浩幸が呼びかけながら肩を揺すると瑠香はこちらを振り向くこともなく「もう。何なの？」と不機嫌そうに返事をした。

「あのさ、その・・・」

予想以上に冷ややかな態度に浩幸は思わず口ごもった。

「だからなんなのよ」

声は聞こえてくるが瑠香は身体を動かさそうとしない。

「例えばさ、お前、結婚ってどう思う？」

今夜、浩幸はそのことばかりを考えていたのだ。

浩幸は三十三歳。世間から見れば結婚するには少し遅い部類に入るのかもしれない。高校や大学の同級生の中でまだ結婚していないのはほんの一握りになってしまっていた。しかし、だからと言って浩幸が焦りのようなものを感じているわけではなかった。彼も二十歳の頃はそれなりに結婚願望というものがあつて、愛する妻との幸せな家庭を理想の未来として思い浮かべていたこともあつた。何十年かかってもいいからローンを組んでマイホームを買い目に入れても痛くない我が子の成長を眺め、老後には夫婦二人南国で余生を送る。しかし年齢を重ねていくうちにそういった甘美な人生設計はいつの間にか浩幸の心からはらりはらりと剥離していった。それは決して浩幸が世間に擦れたわけではなく、彼が真面目に生きているからこそそういう結論に至るのだった。

結婚するということは当然ながらこれから何十年と同じ女性と生活を共にするということだ。一人の女性を永遠に愛し続けることなど果たして可能なのだろうか。そんな約束は甚だ無責任だと浩幸は思う。「永遠」という誓いはこれ以上ない不実なものだ。「この先ずっと」となどは恐ろしくて口にはできない。守らなくてはいけないものができるといふ事実は浩幸にとっては消極的な響きにしか聞こえなくなった。責任という名目で自分の行動に制約が生まれるのはどう考えても不幸だし、自分以外の人間の幸せを慮る余裕など持ち合わせていないと浩幸は思っていた。月々の小遣いの額に汲々とし子育てのあり方に折り合いを欠く周囲の既婚者の生活を

見聞きすればするほど自分の考えの正しさに確信が深まる。そんな浩幸が結婚について真剣に考えるにはそれなりに理由があった。

浩幸は今日の部長室を思い出していた。

まもなく終業時刻になろうかという頃に突然浩幸は内線で部長の桜井に呼び出された。桜井が浩幸の直属の上司である営業課長の今枝を通さず直接、係長の浩幸に電話を掛けてくるのはこれまでになかったことで浩幸は得体の知れない不安感に顔を強張らせつつ部長室のドアをノックした。

部屋に入ると机に向かって書類に目を通していた桜井はゆっくりと顔を起こし、いつもの身のすくむような鋭い眼差しはどこやらに隠して見たことのない柔和な表情で浩幸を迎えた。相手を崩してソファに座れと手招きする桜井が浩幸は不気味でしかたなかった。

桜井は社内でも指折りのエリートでまだ四十代前半であるにもかかわらず会社の花形である営業部を任せられている。眉間には常に険しいしわが刻まれ仕事に対して妥協することを許さない、自分にも他人にも厳しい人間だった。そんな桜井が満面の笑みを見せることなど浩幸が知っている限りでは一度もなかったことだった。英会話の講師のようにどこかわざとらしくフランクな態度の部長を前にして愛想程度の笑顔を返す余裕さえも浩幸にはなかった。

「何かご用でしょうか？」

浩幸はどこまで沈むのか分からないほど弾力に富んだ革張りのソファに身を委ねつつ苦味の強い居心地の悪さを両の奥歯で噛締めていた。

「まあ、そう構えないでくれよ」

そう言って桜井は哄笑し執務机から離れると煙草に火を付けながら浩幸の向かいに腰を下ろした。浩幸はその部屋に響き渡る笑い声にさらに萎縮しながらも徐々に不快感を抱き始めていた。

「そうおっしゃられなくても」浩幸は桜井の目を初めて直視した。

「部長の直接のお呼び出しは初めてのことですから」

浩幸は一向に用向きを話さず弛緩した表情を浮かべている桜井に

対して言葉の中に棘を含ませたつもりだった。一寸の虫にも、思わないわけにはいかなかった。しかし桜井は「そうだったかなあ」と曖昧にとぼけてゆっくりと煙を吐き出しただけだった。

桜井は時間を掛けて燻らし短くなった煙草を慈しむように丁寧にもみ消しようやく身を乗り出して口を開こうとした。笑顔は消えてはいないがいつもの鋭さが目に戻ってきている。いくつもの修羅場を潜り抜けてきたであろう男の顔にはこの若さで会社内の評価を揺るぎないものにした逞しさが漲っているようだった。浩幸は反射的に目と耳を桜井に向けて集中させた。

どことなくきな臭さを浩幸は感覚的に嗅ぎ取っていた。この呼び出しは何かの前触れであることは間違いない。しかし自分の身の回りのどこに火種が燻っているのか予想もつかなかった。

「村瀬君。君は今度のN地区の再開発プロジェクトを知っているかね」

そんな話は初耳だった。N地区は都心に位置し従前より開発に開発を重ねられてきた区域で今さらどこにも我が社が手を付けるようなところがあるようには思えなかった。

「存じ上げませんが」

「そうだろうな。先日役員会で正式に決まったばかりだ」

そう言っただけで桜井は背後の執務机の上に手を伸ばし封筒を掴んで浩幸の前に差し出した。

「あの地区の真ん中には中学校がある」

封筒の中身は数枚の写真だった。そう大くない校舎を色々な角度から撮ったものだった。桜井が言う中学校のものと思われた。

「知ってる通りあの地域は繁華な街だ。狭い区域にビルがひしめき合い娯楽施設もたくさんある。朝も昼も夜もない。そういうところは住むには適さないものだ」

桜井の言わんとすることは浩幸にも理解できた。

オフィス街や娯楽街は進化すればするほど人間の生活を退けていく。都会に働く人間の居住区域はやがてその周辺部に広がっていく

都心と呼ばれる空間に人間が起居する領域は見当たらなくなっている。いわば都会の過疎化だ。見かけ上、人はひしめき合うように密集しているが実際そこに居住している者などごくわずかしかない。「この学校を潰すということですか？」

「察しがいいな」桜井は軽く頷いた。「その学校の敷地を利用してショッピングモールを建設する」

大きなプロジェクトだと浩幸は思った。水平にも垂直方向にも限界にまで伸びきったこの街で一つの学校がぼつかりと空き地に変わる。空間に飢えた資本家たちが戦場で清浄な水を奪い合うようにその土地に群がるだろう。巨額の資金が動くのは必至だった。

「そのプロジェクトを君に担当してもらおう。村瀬君。君がリーダーだ」

浩幸は思わず身震いした。部長直々に呼び出された理由はこれだったのだ。一瞬全身を寒い緊張感が走りぬけたがそれはすぐに治まって今は身体の奥に熱い何か蠢いていた。

「このプロジェクトが成功すれば俺が君を課長級に引っ張ろう。君は三十代半ばにして課長職だよ」

それは異例の出世だった。

すでに桜井は笑っていなかった。射るような視線で真っ直ぐに浩幸を見つめている。浩幸は桜井に試されていると思った。今、浩幸は桜井の傘下に入るかどうかの別れ道に立たされたのだ。

桜井は将来社を担う人物だと言われている。しかしそう言われているのは桜井だけというわけでもない。桜井はこれから社内の権力争いに身を投じ急峻な山の頂きを目指していくのだ。来春専務が体調不良で退職することは社内周知の事実だった。つまり役員のポストが一つ空くわけである。今日浩幸を呼んだのは、桜井がもう一つ階段を上るための準備に入ったということだろう。ここで企業という土壌に勢いよく芽を出しつつある若手を取り込み少しずつ自分の派閥を形成していく算段なのかもしれない。そうだとすれば浩幸は大きな転機を迎えていることになる。今ここで桜井の勢力下に入り

サポートすることで桜井が成功して重役にのし上がって行けば将来の浩幸の出世も約束されたようなものだ。しかし逆に桜井が抗争に破れるようなときは一蓮托生で浩幸の将来の芽も摘まれてしまう可能性がある。

「もちろん美しい花には棘があるのと同じようにつまい話には裏があるものだ。君が有能だということはわかってはいるが、能力さえあれば大きな仕事を成し遂げられるというものでもない」

やはり来たかと浩幸は身構えた。敏腕で鳴らした桜井の戦略だ。一筋縄でいかないことは目に見えている。浩幸は腹の底に力を入れて桜井の言葉を待った。

「条件はただ一つだ」桜井の目にさらに険しさが宿る。「君には私の娘と結婚してもらおう。それが嫌ならこの仕事は他の男に任せよう。私は器の小さい男だ」

浩幸は一向に何の返事もしない瑠香の髪を撫でながらまだ迷っていた。細く滑らかな瑠香の髪は絹のように心地よい肌触りだった。言葉にはしないが浩幸のなすがままにしているということは瑠香も浩幸の掌の感触を嫌がってはいない。瑠香は不快と感ずることを黙って受け入れる女ではない。

「少し時間をください」

あ のとき、瘡のように身体が震えるのをこらえながら部長室で言えたのはそれだけだった。当然だろう。結婚などという人生の一大事をあの瞬間で決めるわけにはいかない。しかし桜井の言葉には否とは言わせない響きがあった。そして浩幸自身も断ることはできないだろうと思っている。今後のことを考えるとあの場で即答しなかったことさえ悔やまれるようだ。桜井はあからさまに自分の傘下に入れと言ってきたのだ。しかも娘の夫にということは今後右腕として働けということであり、これ以上ない待遇で迎えるとのめかしている。ここまで買われては後に引き下がることは難しい。仮に断った場合は桜井によって今の会社で少なからず働きにくくされることは目に見えていた。桜井の冷酷な眼差しが雄弁にそう物語ってい

る。

しかし、瑠香は何と言うだろうか。

瑠香と初めて夜を共にしたのは瑠香が入社してすぐの歓迎会の日だった。どちらから誘うわけでもなく半ば通勤電車に乗るようなよどみのない流れでホテルに入り、気がつけば乗り遅れたバスを追いかけるようにお互いの身体を貪りあつた。そして一年半が過ぎていく。

しかし瑠香とは恋人同士というわけではない。二週間に一度ぐらいのペースでベッドを共にするだけの淡泊な関係だ。今後付き合うだの別れるだのそんな面倒な決めごとは抜きにしよう。二人で迎えた最初の朝にそう約束して別れたのだ。

浩幸は瑠香のほかには誰とも付き合っていないが、瑠香の周りには男の匂いが常に漂っている。瑠香についての社内の赤い噂を全て鵜呑みにするわけではないが火のないところには煙も立たないというものだろう。浩幸自身も瑠香にとって自分が大勢のとは言わないまでも数人の中の一人だという感覚を持たざるを得なかった。

そしてこの関係を浩幸は気に入っていた。この年齢になつてくると一度関係を持った女は結婚を意識してギラギラした目で男を追いかけてくる。そんなゴールありきといった付き合いに浩幸は閉口していた。絶対に結婚しないと頑ななわけではなく行き着くところまで来た感があればそのときに初めてそういうことを意識すればいいと浩幸は思っているのだが、付き合う女性達は「いつ結婚するの？」という口調で、「捨てないで」という目つきで、浩幸をがんじがらめにしようとする。そうなると浩幸は息苦しくなつて逃げ出したくなるのだ。瑠香はそういう目をしない。どこを見ているのか分からなくてあやふやだが、浩幸を追い詰めるような眼差しでないことだけは確かだった。

「誰かと結婚するのぉ？」

ようやく寝返りを打ってこちらに顔を見せ気だるそうに瑠香はそう言った。毛布の裾から現れた乳房が小さく揺れた。まだ目は閉じ

たままだった。

「まだ決めたわけじゃないんだ」

一時間前には執拗に愛撫を繰り返した裸体に言い訳をするように浩幸は言った。

確かに決めたわけではない。だが少なくとも上司の命令としてその一人娘とやらに会わないわけにはいかなかった。そして一旦会ってしまえば桜井部長にも当人に対しても断りづらくなることは分かっていた。明確に断らなければ浩幸にお構いなしに話は着々と進んでいくだろう。浩幸には結婚への真っ直ぐな一本道が目の前にくつきりと見えるような気がした。

浩幸だって木や石ではない。人間である以上肌を触れ合わせれば情も愛着も生まれる。いくら淡白な関係だからと言っても男と女である以上そう易々と割り切れるものではない。今ここで瑠香に「結婚なんかしないで」と泣き叫ばれたら「面倒なことは言わない約束じゃないか」と冷たく突き放すことが果たしてできるだろうか。浩幸にその自信はなかった。そうなれば根気よく説得するしかないのだろう。金でけりをつけることになるかもしれない。浩幸は息を詰めて瑠香の次の態度を待った。

「どっちでもいいわ」瑠香はまるで興味なさそうに眠そうな目をこすり大きくあくびをした。「どっちでもいいけど面倒なことだけはやめてよね。この関係をやめたいならそう言っただけ。やめたくないなら何も言わなくてもいいわ。私、あなたとの気に入ってるからこのままずると不倫になっても全然構わない。おまかせしまあす」最後は半ば楽しそうにそう言っただけで瑠香はするするとベッドから降りてバスローブを身に纏い暗がりの向こうにあるバスルームに消えていった。

毛筋ほども嫉妬心を見せない瑠香に浩幸はほっとしたような気がしたが細い棘が刺さったような寂しさがもたらす心の痛みもチクリと感じていた。

彼女を見つけた瞬間、浩幸は初恋のもどかしさ、はかなさを思い出さずにはいられなかった。そして当時感じた胸の鈍い痛みも何ら変わることなく浩幸の心を締め付けた。

それは中学一年、十二歳の春。新任の石川という音楽教師がその白く細い指をたおやかに鍵盤に下ろした瞬間、浩幸は何か熱く硬いものに胸を貫かれたのを感じた。もちろん見ても手で触ってもそこには何も無い。しかし目に見えない手に触れることの出来ない太い木杭のような何かがそこには確かに突き刺さっていて血の噴き出るような痛みが実際に感じられるのだった。

ちっぽけな心臓が大人になりきっていない身体全体を揺さぶるほど大きく拍動している。浩幸はその痛みに丸めた紙屑のように顔を歪め俯きながらも息を止めて彼女の横顔を覗き見た。誰かを見ているだけでそれこそ死にたいほどに胸が高鳴ることなどそれまで一度もなかった。もちろんそれから一度もない。呼吸の仕方を忘れてしまうほどの胸の苦しみは浩幸がまさに彼女に身も心も奪われていたことの証だった。

思春期の浩幸は石川先生から片時も目を離すことができなくなってしまうていた。音楽の授業以外のときも浩幸は常にならぬ中に彼女を見据えていた。あまりに強く彼女を想っていたがために当然、彼女を目の前にすると緊張のあまりろくに口もきけなかった。授業中の浩幸は彼女に見つからないように見つからないようにと自らの存在感を消すことに執心していた。それは彼女に声を掛けられてしまつたらきつとまともに応対ができず、先生に嫌われてしまつと思つたからだつた。

石川先生は美しかった。その美しさは直視する者の心を圧倒する。アフリカの平原に横たわる巨大な朝焼けと同じように誰にも否定させない絶対的な美だった。クラスメイトの影に隠れその肩越しに彼

女を垣間見る。その程度の距離が浩幸にとって丁度よい幸せをもたらした。それだけで浩幸は満足だった。それ以上のことは何も求めていなかった。

しかし石川先生はその年の夏休みの間に忽然と消えてしまった。それはまるで手品のようだった。大きな魔法の箱に人が入り扉を閉めてちちんぷいぷい。箱全体を一回転させてから箱を開くと中は空っぽ。中に入った人はどこか異次元へ飛んで行ってしまふ。完全なトリックになすすべなく浩幸はただただ呆然とするだけだった。彼女が教壇を下りた理由は当時の浩幸には知りようもない。家庭の事情があつたのか、職場の人間関係に耐えられなかつたのか、教師という職業に強い違和感を抱いたのか。彼女が学校を去ってから周りの教師達は申し合わせているかのように誰一人として彼女の名前を口にすることはなかつた。それはまるで彼女がいた四ヶ月間を白紙に戻そうとしているかのようにだった。新学期になつて不自然なほど平然と授業を進める彼らの顔には彼女の事については一切の質問を受け付けないと書いてあつた。そしてすぐに固太りで厚化粧の非常勤講師が音楽の担当教師としてやってきた。彼女は浩幸の無力でプラトニツクな初恋を嘲笑うかのように大きな鼻の穴を覗かせ当然の顔をして丸々と肥えた指で鍵盤を叩き、浩幸は9月の粘りつくような残暑に喘ぎながら音楽に対して一生分の興味を失っていったのだつた。

熱い紅茶をすすりながらぼんやりと足早に暮れていく窓の外を眺めていた浩幸の視界を小走りに横切つたその女性が浩幸のいる喫茶店に入ってきたとき、浩幸はまず我が目を疑い、暫く経つてようやく目に映つた全てが現実だと理解したときには彼女と結婚することを確認していた。まだ彼女が今日の相手であることに何の根拠もなかつたが、浩幸はそれを信じて疑わなかつた。結婚前提の紹介を受けた人を待つ喫茶店に初恋相手と生き写しの女性が現れた。黒いアンサンブルにブラウンのロングスカートという装いの彼女は俄かに現実とは受け入れがたいほどあの楚々とした佇まいでありながら

も絶対的な存在である愛しい人に似ていた。それは偶然でも何でもないと浩幸は思った。単に似ている人なのではなく、彼女がその人本人だと思わずにはいられなかった。二十年前の種明かしが始まるような気分だった。だとすれば誰のトリックだったのかは知らないが、粹なことをするものだ。浩幸にとって二人のこれからは運命とでも言うしかない確定された未来だった。

入り口付近で店内の様子を窺っていた彼女は果たして浩幸を視界に捉えると脇目も振らずにまっすぐ歩いてきた。

現実を冷たく眺めれば今の浩幸が紅顔の中学生ではないのと同様に彼女もあのとときの音楽教師であるはずがない。しかし浩幸は胸を張り少し頬を緩めてこちらに向かってくる約二十年ぶりの彼女に、うぶな少年時代の小心さが顔を出して思わず身をすくめ目を伏せてしまった。手元を見つめる浩幸の狭い視界に間もなくスカート裾が容赦なく割り込んできて小さく揺れた。

「村瀬さんですよね？」

名前を呼ばれることは分かりきっていたのに浩幸は彼女の声に慌てて立ち上がった。

声までがそっくりだった。浩幸はまだ女というものを知らない純情な中学生に戻っていた。

「あなたが真理さんですか・・・」

全身に鳥肌が立った。足元が揺らぐような感覚をこらえることに精一杯で浩幸にはそれ以上は何も言えなかった。額から汗が勢いよく滲み出すのが分かった。

桜井真理。部長の愛娘だということは既に大事なことではなくなっていた。初恋の女性と正対しているようで浩幸は舞い上がっていた。三十歳を越えた男がろくに女性の顔も見られないとは笑い話にもならないとは思いながらも真理がどうにもまばゆく見えて浩幸は顔を起こすことができなかった。

互いにぎこちなく椅子に座りやがて真理が注文した紅茶が運ばれてくると不意にくすくすと笑い声が聞こえてきた。

「村瀬さん、全然私を見てくれないんですね。私、嫌われてるのかしら」

拗ねるような口調の真理によろやく浩幸も意を決して顔を上げた。そこに座っているのはあのとときの女教師に生き写しの女性だった。彼女を見れば見るほど自分が時間の狭間を旅しているような気分になる。柔らかく肩に掛かる長いストレートヘア、優しいカーブを描いた細い眉、常に微笑を浮かべているように見える口元。ティーカップを持つその指の白ささえもが二十一年前の切なさを彷彿とさせる。

「実は私、村瀬さんにお会いするの初めてじゃないんですよ」

真理が照れたように微笑みながらも浩幸の目を覗き込んでくる。

どこで会ったかを当ててほしいと言いたいような試す眼差しだった。「僕も、初めて会ったという感じがしないんですよ」

正直な感想だった。以前会ったことがあると言われ驚きよりもやっぱりという安心感がそこにはあった。見た目だけではなく仕草からも目の前の真理に初恋の女性を感じてしまう。二十一年前の記憶などあやふやなもので、実際に二人を並べてみれば全くの別人なのかもしれない。しかし、今の浩幸はまるでタイムスリップしたかのような錯覚に陥っていた。思わず真理のことを「先生」と呼んでしまいかねないほどだった。友達の肩越しにはなく、面と向かっていることが僥倖でもあり畏怖でもあった。

「本当ですか？私のこと覚えていてくださったんですね。嬉しい。どこでお会いしたかも覚えていらつしやいますか？」

当然だが真理は浩幸の言葉を勘違いしたようだった。目を丸く見開いたあと嬉々とした笑顔を見せて尋ねてくる真理があまりにも美しく浩幸はひどくたじろいだ。まるで初恋の彼女に言い寄られているような気分だった。もう後には退けなかった。浩幸は必死に記憶を辿って真理との出会いを思い出そうとしていた。しかしそんな記憶などどこにも無いのは明白だった。真理のような女性に出会っていたら忘れるはずがないのだから。浩幸は必死にその場を取り繕

う言葉を探した。しかし、今の浩幸の脳は壊れた洗濯機のようにガタガタと揺れているだけで全く用をなさない。過ぎていく一秒一秒が重く浩幸の肩にのしかかっていた。

「やっぱり」真理は一瞬言葉を詰まらせた。「思い出せませんよね」

浩幸は当惑した。落胆した真理の表情にあからさまに浩幸への好意が読み取れる。

事態は浩幸の当初の目論見とは全く違う方向へ展開してしまっていた。

一昨日の溜香との情事のあと、浩幸は来るべき上司の愛娘との出会いについて悲観的な考え方をするようになっていた。喫茶店で真理を待つ間はいかに波風立てずに桜井に断りを入れるかということだけを考えていた。いくら飛ぶ鳥落とす出世を重ねている上司の娘だからと言っても「はい喜んで」と妻にするわけにはいかない。一人娘として姫君姫君と甘やかされて育った高慢な女だったらどうするのか。それに上司の娘と結婚しても毎日毎日肩身の狭い思いをするだけのような気がする。会社では桜井の命令に絶対服従で家に帰れば桜井の娘の顔色を窺って生きていく。約束された地位の代償としてそんな生活がこの先何十年と続くのかと思うと背筋が寒くなる。さらに浩幸は真理の気持ちについても考えてみた。突然父親の意向で結婚相手を決められたとあっては彼女も今回の出会いは面白くないはずだ。どこの馬の骨とも分からないおじさんと生涯を共にしろと言われても年頃の女性は嫌悪感しか抱かないだろう。彼女は二十一歳だという。まだ若い。結婚などどこかの国の御伽噺みたいなもので自分が現在直面すべき問題とは思えないに違いない。ここは一つ彼女を丸め込んで小芝居を打ってもらい、「まだ誰のものにもなりたくない。もう少しパパの傍に置いてほしい」と泣いてもらうのが一番だ。

しかし会ってみると事情は違っていた。やってきた上司の娘が自分の初恋の女性と瓜二つで、その彼女がこの結婚話に積極的な素振

りを見せている。浩幸の心は否応なく弾んでいた。会うまでの消極的な気持ちはすでにどこやらへ霧散している。今はいかに彼女の気持ちを自分の方へ手繰り寄せるかということに一心不乱になっていた。

浩幸は焦った。真理の様子から以前どこかで会っていることは間違いない。浩幸は考え込んだ。しかし浩幸が黙考する様子を見せれば見せるほど真理は落胆していくようでもあった。

「会社のスキー旅行ですよ」諦めたように真理が口を開いた。「私、高校生のときから毎年参加してるんです。でもあの旅行って毎年大勢参加してるから覚えてらっしゃらなくて当然ですよ。気になさらないでください」

スキー旅行と言われてもまだ浩幸は真理のことを思い出せなかった。そもそもスキー場ではみんながみんなスキーウェアに身を包みニット帽を深く被ってゴーグルまでしているので顔や体型がよく分からず区別がつきにくい。

家族や社員同士の親睦を深めるために開かれる社内の一泊二日のスキー旅行は毎年恒例の行事だった。建前は自由参加となっているが若い社員は強制的に参加させられることになっている。浩幸はこの旅行が鬱陶しくて仕方なかった。まず第一に会社の外でまで会社の人間とは会いたくない。それがたまの休みの日に一日中会社関係の人間と顔をつき合わせていなくてはならないことに果てしないストレスを感じるのだ。

スキー場につくとスキーの得意な浩幸は他に何人かの滑れる連中と一緒に初心者を集めてスキー教室を開くことをいつも命じられる。せっかくスキーをしに来たのだから一人で自由に滑っていたい。それなのに雪の上でろくすっぽ立っていることもままならない素人連中を相手に短い距離を少しずつ刻んで降りていくのだ。会社の人間だから冷たく突き放すこともできない。少しでも進歩を見せれば歯の浮くような褒め言葉も用意しなくてはならない。その結果肉体的にも精神的にも不快な疲れを身体に蓄積したまま月曜日を迎えると

いうことになる。つまるところ浩幸にとって毎年のスキー旅行にいい思い出などなかったのだ。ようやく浩幸も若手を卒業し、ここ数年は何かと理由をつけて不参加を勝ち取るようになっていた。

「ああ、あれに参加してたんですか。覚えてなくて申し訳ない。あの旅行って本当に大勢参加するもんだから」

真理は笑顔を湛えて首を振った。

「いいんです。みんな同じような格好で滑ってるし。それに私、夜の宴会にはほとんど出てないですから。ああいう場所って苦手で……。だから村瀬さんと顔を合わす機会ってほとんどなかったんです。でも私毎年村瀬さんのスキー教室を楽しみにあの旅行に参加してたんですよ。毎年参加してるからある程度滑れるようになったんですけど、それでも滑れない振りをしてレッスンを受けてました。ここところ村瀬さんが参加されてないんでレッスンが受けられなくて私、寂しかったんです」

自分の言葉に上気したように頬を赤らめて俯く真理に浩幸はどきりとした。こんなことを言われて嬉しくないはずがない。

「そんな風に思ってもらえてたならやって良かったな。正直言うとなあの旅行に参加するのいつも嫌々だったんだよね。だから最近は何かと理由をつけて断ってたんだけど、楽しみにしてくれてる人がいるなら来年からまた参加するよ」

浩幸は平静を装いつつ咽喉に激しい渴きを覚えてすっかり冷めた紅茶を飲み干した。

「嫌になるっていうのはよく分かります。滑れない人を教えるのって大変だろうなっていつも思っていました」

「僕は人に教えるのって向いてないのかもしれないな。相手が会社関係者だから気を遣わなくちゃいけないくて余計に疲れるし。おじさんお婆さんの相手をするのは会社の中だけでもう十分」

浩幸は苦笑して言った。真理は浩幸に微笑を返したがすぐに寂しそうに目を伏せた。

「私は同年代より年上の方が好きですけど……。そうですね。」

会社関係って迷惑ですよ。私自分のことばかり考えてお呼び立てしちゃって・・・すいませんでした」

そう言って頭を下げる真理に浩幸は当惑した。軽い冗談が真理を傷つけるとは思ってもよらなかった。

「そういうつもりで言ったんじゃないんだ」浩幸は慌てて身を乗り出して否定した。「迷惑だなんてとんでもない。こんなにきれいな人に出会えるなんて思ってもみなかった。部長に感謝してるぐらいだよ」

「本当ですか？本当にそう思っていただけですか？」

真理はまだ自信なさそうに訝しげな上目遣いでこちらを見ていた。

追い風が吹いている。流れに乗っている。全てが良い方向に回っている。

部長は言葉通り浩幸を新プロジェクトのリーダーに指名した。そのプロジェクトは全て浩幸の思いどおりに動き出している。忙しくて真理と会う時間は限られてしまうが、電話で声を聞くだけで癒し効果は絶大だった。浩幸は己の中に漲る巨大な力を感じていた。噴火口から無尽蔵に溢れ出す溶岩があらゆるものを押し流し焼き尽くす。浩幸が感じている力のイメージはそういうものだった。自分の道を自分で切り拓く。何物も自分にとっては何の障害ともなりえない。上手くいきすぎて怖いという感覚もない。もともとこれだけの実力を自分は内に秘めていたと浩幸は思っている。きっかけさえ掴めればいつでも大輪を開花させるだけの土壌は用意されていたのだ。そしてそのきっかけはすでに浩幸の手の内にあっただ。それは真理だった。男は女で変わるものだをつくづく浩幸は思っていた。真理と出会ったときに、自然の力でもなければ神やら仏やらといった観念めいた抽象的なものでもない、もっと大きく具体的な何かを浩幸は自分の中に感じていた。それもこれも選ばれし人間の運命とさえ言えば言えなくもないが、その運命が指し示す道筋でさえ自分の力でどの方向にも変えてしまえる気がしていた。初めて真理を抱いたときに浩幸は今後の人生を謳歌するために必要な全てを手に入れたことを確信していた。

部長室に入ることに躊躇することはなくなっていた。三ヶ月前に初めて桜井に呼び出されたときには手に汗握ってこの扉を叩いたものだと浩幸は苦笑した。あのときは全くの別人になっている。

浩幸は部屋の主人に対して親しみを込めて軽くノックし、返事を待ってゆっくりと足を踏み入れた。

「順調そうじゃないか」

浩幸にソファに座るように勧め、自分も浩幸と対座すると桜井は満足そうにそう言った。

「ありがとうございます」

何のことについて桜井が順調だと言ったのか浩幸はあえて聞かなかった。それは全てが順調だったからだ。

「親馬鹿だと思つかもしれないが・・・。娘がね、ここのところ何と言つかその、美人になったと言つかきれいになったと言つか・・・。その、あれだ。色っぽくなったような気がするんだ。顔つきだけじゃないんだ。ちょっとした仕種なんかもね。こう、女を感じさせる何かがあるんだよ。多分、君と会ってからなんだろうなあ。本当に、親の俺が言うのもおかしなもんだが、女は男で変わるもんだね」  
寂しい気もするんだけどね、と恥ずかしそうに小声で言った桜井は一人娘の親の顔をしていた。常に冷静な桜井の皮膚の奥にも人間の血が流れているのだ。人前で見せたことのないはにかんだ表情の桜井を見ていると部下として義理の息子として親愛の情を抱かざるを得ない。

この人を支えていこう。

そして自分ものし上がっていくのだ。浩幸は桜井の右腕としてどんなときも桜井を親衛するつもりになっていた。桜井を守るためなら弾幕に身をさらしても構わないとさえ思っていた。

社内出世競争は苛烈である。その中を生き残るためにはもちろん業績を上げて上層部に実力を認めさせなければならぬ。部下に信頼され彼らにとって仕事のしやすい環境を作っていくことも必要となってくる。しかしそれらにも増して今後重要になってくるのが謀略だった。トップを目指しているのは桜井だけではない。この企業の中には優秀なライバルが綺羅星のごとく各部署に散在しているのだ。人の上に立つにはあるときは彼らを蹴落とし、またあるときは足を引っ張ってでも這い上がっていくしかない。そのためには上層部の意向から平社員の噂までのありとあらゆる情報を集め分析し時期を見計らって最も有効な策を弄していく参謀が必要だと浩幸は

思っていた。上層部にパイプがあるわけでも、取締り連の二世というわけでもない、つまり自分の実力だけの成り上がり者である桜井にとっては手となり足となつて働いてくれる優秀な懐刀が欠かせない。その戦国武将の軍師とも言ふべき存在に浩幸はなるうとしていたのだつた。

「男も女で変わるようです」

浩幸の実感だつた。今の浩幸は全てが良い方向に進んでいると信じて疑わない。その原動力は真理だつた。真理という女性に出会つたことで浩幸はこれまでの真理に出会うまでの自分の生きてきた過程が何一つ間違つていなかったと思えるのだ。人間は毎日毎日何らかの選択をして生きていく。そして三十三年の人生には浩幸なりにいくつもの岐路があつた。そのあまたの分岐点においてその都度選んできた道の果てにたどり着いたのが真理だつた。自分の下してきた大小様々な決定が全て正しかつたと証明されたような気持ちだつた。それだけ浩幸にとって真理は完璧な女性だつた。

「で、どうする？」

桜井の眼差しが途端に厳しさを取り戻した。この切り替えの早さも桜井の才能の一つだつた。彼は軽く身を乗り出し浩幸をその心の動きを読み取るかのように正面に見据えた。まるで命の取り合いをするかのような隙のない表情だつた。それは浩幸を部下としてではなく一人の取引相手として見ている証拠だつた。そして言外に意に反するようなことは力に訴えても許さないうきな臭さを感じさせている。これが最後の意思確認であることは間違いない。しかし浩幸は全く臆することなく稀代の傑士の目を見据えた。

「私なら部長のお役に立てるはずですよ」

まさに契約だつた。桜井が浩幸の能力のたぐいまれさを評価し味方に引き入れたいと思ひ、浩幸も桜井が自分の才能を駆使するに値する人間だと値踏みしたということだつた。それは上司が部下を登用したという上下関係ではなく、互いが互いを認めて同盟を結んだという対等な契約と言えた。

桜井は浩幸の答えに二度三度と満足そうに頷き、やがて口から息を漏らすと大きく一笑した。

「私の目に狂いはなかったようだな」桜井は卓上のケースから煙草を取り出しおもむろに火を点けた。「しかしこれだけは言っておくが結婚は真理が望んだことだ。確かに私は君を側近にほしかったが真理をだしに使うというつもりはさらさらなかった。分かってると思うが君が私の部下である以上君を味方に引き入れる手立てはいくらでもあるからね。それに君だって時期が来れば当然自分から私につくことを選んだだろう。だが真理がどうしても君に会いたいと言うものだから条件にしたまでだよ。おかげで話は早くなっただけだね」

「私のような若輩者を買っていただいて光栄です」

「君には私と同じ匂いを感じるんだ。君も人の上に立ってやろうという気概を四六時中胸の奥で燃やしてるんじゃないのかな？時にはその炎の熱さをもてあますこともあるだろう」桜井は満足そうに頷いて言った。「今度我が家に来るといい。真理の母親が早く会わせるとつるさくてな。真理も君に手料理を振舞うと言っている」

浩幸は丁寧に礼を述べ席を立った。ドアに向かう浩幸の背に桜井が付け足しのように声を掛けてきた。

「そうそう。女関係のトラブルはないようにしてくれよ。君に限って抜かりはないと思うが」

「それで？」

瑠香が珍しく半身を起こし自分から声を掛けてきた。小さく揺れる乳房やその先に咲いた少女のもののような可憐な桜色の花を隠そうともしない。それはいつものことだった。瑠香にもう少し恥じらいというものが備わっていれば自分は溺れてしまっていたかもしれないと浩幸は両の乳房を横目に捉えつつ小さく嘆息した。

「ねえ。どうするのよ」

浩幸はぼんやりと天井を眺めながら、みんなが俺にどうするか聞いてくる、と思った。悪くない気分だった。

いつものラブホテルの一室。汗ばんだ肌と肌。習慣的な煙草の煙。瑠香がこの情事の後の物憂いような雰囲気を自分から打ち消すことなど今まで一度もなかったことだ。しかも瑠香の問いかけには隠そうとしても隠しきれない張りつめたものが伝わってくる。

「何を？」

寝返りを打ち枕の向こうの灰皿に煙草を押しつぶすと浩幸は軽くとぼけてみせた。とぼけついでに眠そうな振りまでしてみせる。

瑠香の言わんとすることが分からないほど鈍感ではない。ましてやここ数日はまさに「どうするのか」だけが浩幸の気掛かりだったと言ってもいい。だからこそ瑠香と会うのを一日一日と延ばしてきたのだった。

もちろん答えは出ている。瑠香とは別れるしかない。他の女ならいざ知らず浩幸の心の中は真理という完璧な女が完全に根を張ってがんじがらめになっている。後は切り出すタイミングだけの問題だった。身体だけとは言え二年以上も男と女として互いを許しあい求め合ってきた女性に別れを告げるのは浩幸にとってそれなりにエネルギーの必要な仕事だった。そして今日関係を断ち切るつもりで会ったのに何も言えず仕舞いで今までと何ら変わらず瑠香の身体に顔を

埋めてしまった自分に浩幸は遅しくも哀れな雄の性を見出していた。それだけ瑠香との情交が本能的に捨てがたいものだということなのかもしれない。しかもいつもは受身で浩幸に任せきりの瑠香が今日に限ってまるで浩幸の気持ちがかかるかのように浩幸の動きに合わせ、巧みに身を踊らせ浩幸にこれまでにないほどの深い恍惚を堪能させていた。真理のことしか眼中にないはずの浩幸をして満足させる瑠香の性技は賞賛に値する。

「何を、じゃないわ。私たちの関係よ。・・・あなた結婚するんですよ？」

少しいらだつたような拗ねる口調だった。眉根を寄せた表情の奥には振られることを予期した女の芯の強さを感じさせる。少しずつ切り刻んでいくような真似はせず一思いにやってくれと身体全体で浩幸を責めつける。

「まだ決めたわけじゃない」

「嘘よ」

瑠香らしくない神経質な口調だった。

「嘘じゃないよ」

「絶対に絶対に嘘。あなた毎日自分の顔を鏡で見てるの？幸せに毒された腑抜けた顔になってるわ。すっかり骨抜きにされちゃって」瑠香にここまで舌鋒鋭く浴びせられると浩幸は押し黙るしかなかった。

「で、どうするのよ」

「どうするって言われてもなあ・・・」

浩幸は少なからず驚いていた。いつかは話し合わなくてはいけない問題ではあるが恋だの愛だのという言葉に無関心だと思っていた瑠香の方から今後のことを切り出してくるとは想像していなかった。いつか浩幸から打ち明けたときに「あら、お幸せに」と抑揚のない返事をするものだとは高をくくっていたのだ。それが瑠香の方から耐え切れないとばかりに声高に詰め寄ってきている。浩幸は瑠香の真意を掴みきれていなかった。

瑠香は常に背後に複数の男の影をちらつかせている女だ。一目で貢物と分かるアクセサリーで身を飾り、あなただけじゃないのよと言わんばかりに暇があれば携帯電話を操り、自分からは一度たりとも連絡をしてくることのない女。その瑠香が二人のこれからについて蛇のようにまとわりついてきて執拗に尋ねてくる。

瑠香は別れたくないのだろうか。だとしたら瑠香は取り返しのつかないミスを犯してしまっている。これからのことをはっきりさせるといふ愚拳は男に別れを告げさせる絶好のきっかけを自ら演出していることに他ならない。本当に別れたくないのならここは浩幸に口を開かせる隙を与えることなくいつもどおり情事の後の忘我を楽しみ、いつもどおりそそくさとシャワーに行くべきだったのだ。浩幸の心が離れていくことを察して取り乱しているのだろうか。しかし瑠香がそんな愚かな女だとは思えなかった。だとすれば……。

瑠香の方が別れたがっているのかもしれないと浩幸は思った。泥沼の不倫になる前にいっそ潔く自分から手を切る。面倒が嫌いな瑠香なら当然の発想だし、それが彼女の女としての矜持というものなのかもしれない。

「前にも言っただと思うけど、私、不倫でも全然かまわないのよ。奥さんにばれないように上手にやる自信あるもの。私たちってセックスの相性は抜群だし、二年も付き合ってきた仲なんだからお互い気楽でしょ。今のペースが重荷なら一ヶ月に一度ぐらいにしましょうよ。ね。私たち……」瑠香は幾分上目遣いで浩幸の目を覗き込むような視線を送ってきた。「別れる理由なんてどこにもないと思うの」

浩幸は心の中で苦笑した。浩幸が結婚するというだけで十二分に別れる理由になるはずだ。つい先日は面倒なことは嫌だと言っていたくせに、今日は自分からばれないように上手にやるからと提案してくる。こんなに饒舌で支離滅裂な瑠香は初めてだった。高飛車な物言いだがつまるところ浩幸と別れたくないだけなのだ。能動的に

浩幸の身体を求めてきた先ほどの動きは彼女なりに媚を売ったということなのだろう。必死に冷静さを取り繕っていながらも焦りの目立つ瑠香がやけに幼く見えた。

つい先日までは二人の関係は完全に瑠香の胸先三寸で決まっていた。会社の中では上司と部下の間柄でも勤務時間外の行動は全て瑠香が主導権を握っていた。浩幸がいくら二人きりで会いたいと言ってもそのために瑠香は自分の予定をずらすようなことは一切しない。私はあなた一人のために存在しているわけじゃないのという表情で浩幸の顔を視界に入れることもなく頓着なく却下する。それでも懲りずにオファーを出し続けると何度目かに運良く瑠香の予定が空いていることがあって漸く二人の時間を確保できるという具合だった。浩幸にとっては「瑠香と会う」ではなく「瑠香に会ってもらう」のが常だったのだ。

それが浩幸の心を真理が独占するようになった途端に瑠香は変わった。今日のデートも瑠香が言い出したことだった。ましてや今日のように瑠香がベッドの上で浩幸に媚びることなど一度もないことだった。すがるような目の瑠香が浩幸の視界に自ら入ってこようとする。気がつけば浩幸を中心に瑠香がその周りを動いているのだ。

余裕があるからだろうか。

真理を心から愛している。そして真理に愛されている自負がある。そのことが浩幸に果てることのない力を与えてくれる。満ち足りた人間にはゆとりがある。浩幸は今何の不安もなく身の周りの全ての事象を見渡すことができる余裕があった。真理を愛することで生まれた懐の深さが結果的に瑠香をも惹きつけることになっているのかもしれないと浩幸は思った。

気がつけば瑠香は今にも泣き出しそうな顔で浩幸の胸の辺りをぼんやりと眺めている。そこを見ているようで違う何かを見ているようなあやふやな視線だった。浩幸は瑠香の沈痛な色の額に声を掛けた。

「いいよ、このままで」

浩幸はこの一言で風船が割れるように弾ける笑顔で瑠香が見せるものと思っていた。しかし瑠香が見せた表情は全く違っていた。

泣き出しそうな暗い顔つきはそのままに違う世界を彷徨っていた目つきだけがやけに鋭くなって痛いぐらい真っ直ぐに浩幸の眉間を撃ち抜いてくる。これはどういうことだろうか。本音が何かを探るために必死に浩幸の心の裡の裡を覗こうとしているのは間違いないだろう。しかしそれだけではない。これまでの関係を維持したいという瑠香の言葉は偽りのない気持ちなのだろうが心の奥ではこのまま浩幸と付き合っても自分が惨めになるだけだということを悟っており、いつそこで別れを告げてほしいという深層心理がその表情には表れているように見えた。

「ほんと？」

浩幸の言葉を瑠香は信じていない。軽く身を引いて浩幸の顔だけでなく上半身全てを視界に捉え、どこかにある嘘を見破ろうとしている。まるで格闘技をしているかのような緊張感のある間合いの取り方だった。

「何だよ、その目は」

「だって・・・」

瑠香はそう言ってようやく目から力みを抜き、もうどうしたら良いのかわからないと言いたげな困惑に満ちた顔で浩幸の唇を求めてきた。浩幸は瑠香の唇を受け止めながらその絹のようにしっとりとした髪をゆつくりと撫でた。

「ほんとにいいの？」

長いキスの後もう一度確かめると瑠香は疲労困憊の態で倒れこむように枕に顔を埋めて大きく吐息を漏らした。そのため息の色は一つではないようだった。

愚かな女だ。

しかしいつの時代も女は愚かであるほど可愛らしく見えるものだ。浩幸は瑠香と関係を持って以来初めて瑠香のことを愛しく思った。

桜井の言葉がちらっと浩幸の頭を掠めた。桜井は女関係についてトラブルを起こすなと言っていた。逆に考えればトラブルさえ起こさなければ問題ないということになる。都合の良い解釈だが今はそれも許される気がした。浩幸は再び瑠香の身体に覆いかぶさっていた。

浅緑の鮮やかな芝。上品さ漂う象牙色の壁。暗く冷たいドーバーの海に似た紺碧の屋根。いかにもヨーロッパを思わせるその家屋敷に薄暮の角度の低い陽光がセピア色に映えてその一画は何とも幻想的な情緒を醸し出していた。門の前に立つと家の中からピアノの音色が聞こえてきた。忘れもしないベートーベンの「悲愴」第二楽章。目の前の情景と叙情的な安らぎをもたらすメロディーのために浩幸は我を忘れてしばらくの間立ち尽くしていた。

これは真理が弾いているのだろうか。石川先生が放課後の音楽室で弾いていたのを一度だけ耳にしたことがあった。クラシックのク字も知らなかった中学生の浩幸はメロディーだけを必死に記憶に焼き付け方々歩き回ってやっと探し出した曲だった。また二十年前の初恋の空虚さが生々しい痛みと共に浩幸に襲い掛かる。石川先生が学校を去ってから何度この曲を聴いたことだろうか。

石川先生はどこへ行ってしまったのか。何故黙って消えてしまったのか。

浩幸は目が眩み平衡感覚を失いそうになるのを目を閉じ門扉にすがりつくようにして必死にこらえようとした。その拍子に浩幸の肩がインターホンに触れてしまい家の中にチャイムが鳴るのが分かった。手土産として持ってきた花束が揺れて足元に白や赤や桃色の花びらが鮮やかに散っている。ピアノの旋律が止み、やがて黒いインターホンから若い女性の声が聞こえてきた。愛しい人の訪いを今か今かと待ち焦がれていたような弾んだ調子だった。

これは真理なんだ。

努めて思い込もうとするのだが目に浮かぶのはあの音楽教師の姿だった。まもなく真理が今度は訝るような声で誰何する。浩幸の脳裏に浮かび上がる初恋の微笑みは二十年も会っていないのに一点もぼやけたところがなかった。

「僕です」

咽喉の渴きをこらえかすれ声で何とかそれだけを伝えると浩幸はもう一度強く目を閉じ自分に活を入れた。

「やっぱり浩幸さんなのね。どうぞ入って」

門扉を開き芝生の間に作られた石畳を歩いていくと内側から木製の大きな玄関のドアが勢いよく開いた。ドアから顔を出した真理はやはり美しかった。夕日のせいか実家に彼を迎えることに対する照れなのか真理の頬は朱に染まって見えた。引いたばかりと思われる口紅で滑らかに光っている柔らかそうな唇が浩幸の心を惹きつける。「遅いじゃない」

待ちくたびれたという頬を少し膨らませた表情が浩幸の愛情を掻き立てる。石川先生の姿を追うのは幻を捕まえようとするようなものなのだ。浩幸は努めて真理のことだけを考えようとした。

「真理、履物を履きなさい。行儀が悪い」

桜井の優しくたしなめる声が奥から聞こえてくる。視線を足下に落とすと真理は素足で玄関の外に立っていることに気付いた。真理は朱に染まっていた頬をさらに赤らめ飛び跳ねるようにして家の中に戻っていった。思わず微笑んでしまうような愛らしい仕草だった。花束を渡そうとして追いかけるように玄関に入ると淡い若草色のポロシャツにベージュのチノパンツ姿の桜井が真理と衣料品の広告のモデルのように笑顔を浮かべて並んで立っていた。さりげなく真理の肩を抱いている桜井と桜井に身を委ねる真理のツーショットはあまりに仲が良すぎて少し違和感を覚える。一人娘を男に取られる父親の時の流れに対する精一杯の抵抗かもしれないと浩幸は思った。「ママ。いつまでもピアノ弾いてないで。村瀬さんがいらっしやっ  
たわよ」

真理が呼びかけると真理の母親らしき人の返事をする声が返ってきた。

「真由美、早く顔を見せなさい。村瀬君に失礼だろう」桜井が会社とは違う種類の柔和な威厳を見せた。「村瀬君が来るっていうんで

家内は朝から落ち着かないんだよ。ピアノを弾いて気持ちを鎮めようとしているみたいだけどうまくいかないらしい」

「惚れ惚れする腕前ですね」

「それだけが取り柄なんだ」桜井は苦笑した。「真由美。いい加減にしなさい。村瀬君には仕事でも世話になっっているんだから」

ようやく奥から出てきた真由美と呼ばれた女性に浩幸は我が目を疑った。あまりに念じすぎて現実の世界をそのまま網膜に映し出すことができなくなってしまったのだろうか。それともこの家の玄関が時空の境界で浩幸自身がタイムスリップしてしまったのか。

「いらつしゃい。真理が男性を家に呼ぶなんてことが今までなかったものですから、こつちが緊張してしまつて。ごめんなさいね」

真理の母親は言葉とは裏腹に露ほどにも落ち着きを失っている素振りなど見せず自然に微笑んで見せた。それは紛れもなくあの微笑だった。柔らかく肩に流れていた髪には少しウエーブが掛かっているが、白のブラウスの袖の先から見えるさらに白い指先は二十年前のままだった。見間違えるはずがない。石川先生。そう言えば真由美という名前だった。「何も変わっていない」と浩幸は思わず口の中でつぶやいた。彼女はあのと時のままの姿で浩幸の眼前に降り立ったのだ。浩幸は自分が中学生に戻つたような時の歪みに陥っていた。しかし今浩幸の姿を隠してくれる生徒たちはいない。二十年経つて初めて浩幸は初恋の音楽教師と正面に向かい合いその声を聞いたのだった。

「お邪魔します」やっと言えたのはそれだけだった。それ以上長い言葉を口にすれば言葉が震えてしまいそうで浩幸は一旦呼吸を整えた。「飾ってください」

浩幸は後ろ手に持っていた花束を真由美に向かって差し出していた。

「まあ、素敵」

真由美は受け取った花に顔を近づけて幸せそうに鼻から息を吸い込んだ。浩幸はまるで自分の顔に彼女が顔を近づけてきたような錯

覚を覚え顔を赤らめた。あまりに花が似合う彼女の姿にただ見とれるだけだった。一瞬花の向こうから真由美がこちらに視線を送ってきたような気がして浩幸は弓矢で射すくめられたように棒立ちになった。またあのとときと同じ胸に太い杭を打ち込まれたような痛みを覚えた。苦しいほどの幸福だった。

「どうしてママがもらうのよ」

拗ねたように真理が母親と浩幸を交互に睨みつける。

母娘を並べて見比べると淑やかさ、慎ましさにおいて真由美が勝っていることは否定のしようがない。二人とも匂いたつような美貌の持ち主で、まるでそれは奇跡のような光景なのだが浩幸には真由美しか見えていなかった。求めていたものが今はつきりとした。実物の輝きを知ってしまったえばどれだけ精巧に作られていても所詮イミテーションの煌きには見る影もない。若さにおいては当然真理に分があるがその華々しさが今は毒々しいようにさえ見えてしまう。浩幸は真理を邪魔だと思っている自分に驚いた。

「今日ぐらいいいじゃないか、真理。さあ、上がって」

桜井の声で金縛りが解けたように浩幸は我に返った。全身に血の流れを感じ正気を取り戻したときには浩幸は今度は浮き足立つような感情に満たされていた。石川先生に再会した。同じ空気を吸っている。言葉を交わすのは浩幸の自由なのだ。誰に咎められることもない。彼女自身が両手広げて迎えてくれた。浩幸はこれ以上望むことはないと思っただ。

真理が浩幸の手を引くようにして入ったのは彼女の家から歩いて十分と離れていないレストランバーだった。窓のない半地下の店内は薄暗く灯りといえは天井や壁に設置してある橙色の間接照明とテーブルやカウンターのろうそくの火だけで、その弱々しく揺れる光の散らばり具合が見る者の心を和ませる。学校の教室より少し広いフロアの中央には異彩とも言える真っ白なグランドピアノが据えられていて重々しい威圧感を放っていた。知る人ぞ知る名店なのか客入りは上々で奥のカウンターに空席はなく、幾つかあるテーブルもほぼカッパルで占められていた。

「ちよつと待つてて」

浩幸をおいて真理は慣れた足運びでカウンターに向かいそこでグラスを磨いている口ひげを生やした豊満な体格のバーテンと何やら言葉を交わした。四十がらみのそのバーテンは真理に対して申し訳なさそうに顔をしかめ隅にある小さなテーブルを指差した。真理は浩幸のところまで戻ってくると勧められた席に座って待つているように言い自分はまたカウンターに戻って行ってバーテンからビールグラスを二つ受け取って帰ってきた。

「やっぱり込んでるなあ」真理は申し訳なさそうに上目遣いでこちらを見た。「こんな窮屈な席になっちゃってごめんね」

浩幸が席のことは気にしないと、感じのいい店だと誉めると初めて真理は安心したように微笑みを漏らし得意そうに語りだした。「真理ね、学生の頃ここでバイトしてたの。注文を取って飲み物を運んでグラスを洗ってレジを打って。たまにあのピアノを弾かせてもらったりして」真理は懐かしそうに中央のグランドピアノに目を細め恥ずかしそうに顔を伏せた。「人に聞かせられるようなものじゃないんだけど」

「真理のピアノ聞きたいな。今日は弾かせてもらえないの？」

「マスターに頼めば弾かせてもらえると思うけど……。でもママと違って真理は本当に下手なの」

浩幸は突然の真理の母親の話題に胸が締め付けられるような息苦しさを感じてビールに手を伸ばした。思い出すまいと念じても中学校の音楽教室で一心に鍵盤の上に指を踊らす石川先生の姿が脳裏を掠める。白熊のような重々しい図体のグランドピアノで石川先生が華麗に「悲愴」を奏でるのを眺めながら冷えたビールを飲めたら何と幸せなことだろう。どっしりとぶてぶてしいあの獣が石川先生のしなやかな指先によって操られ見た目からは想像もできないような繊細かつ哀愁漂う声音で鳴く様子が目に浮かぶ。それはまさに地上の楽園のようだった。

しかし、まさかこんなところで再会しようとは。

浩幸は桜井家で初恋の相手を見つけた瞬間を思い出していた。あのとき浩幸はもうここで死んでも構わないとさえ思っていた。しかし、時間が経てば経つほど世界中の宝を手にしたような昂揚感は薄れ、前進も後退も迂回することさえもままならない閉塞感が首をもたげてきた。婚約者の母親であり、尊敬すべき上司の妻。浩幸にとって最も侵してはいけない聖域に彼女は姿を現したのだ。こんな形ならいつそ会わない方が良かった。彼女は死んだと聞かされた方がまだ幸せというものだ。真理との結婚は秒読み段階にある。しかし真理の顔を見るたびに今はや面影ではない石川先生本人を感じないわけにはいかないのだ。「娘を幸せにしてください」と思いつめたような顔つきで頭を下げた初恋の女性。今、真理と別れることは石川先生を悲しませることになる。茨の道はもう引き返すことはできない。胸苦しさに浩幸は気が遠くなるようだった。

「今日浩幸さんが家に来たときピアノが聞こえたでしょ。あれ、ママが弾いてたんだよ。真理のピアノは趣味程度だけど、ママは音大出てるし、今でも時々パーティーに呼ばれて弾くぐらいのプロ級の腕前なんだから」

真理はまるで自分のことを言うように誇らしげな顔で母親の自慢

をした。それが浩幸には最愛の女性を誉められたようでこそばゆいような気分だった。真理に二十年前のピアノを弾く石川先生がいかにも美麗だったかを教えてあげたい衝動を必死にこらえた。目を閉じればあの叙情的な旋律が耳に聞こえてくるようだった。

「お母さんのは聞かせてもらったから、今度は真理が弾くのも聞いてみたいな。マスターにお願いして聞かせてよ」

真理は初めのうちは浩幸の要望に乗ってこなかったが、やがて浩幸の懇願が功を奏した形となって「分かったわ。マスターにお願いしてくる。でも下手でも笑っちゃだからね」と言うと矢庭にグラスのビールを一息に飲み干して決然と席を立った。拳措の端々に育ちのよさを感じさせる真理が時折見せるこついった粗野な振る舞いは浩幸を爽快な気分させる。

真理はつかつかとカウンターに歩を進めマスターの耳元に口を近づけピアノを指差して交渉しだした。マスターが二度三度と頷いたようだった。すると真理はすぐに笑顔で浩幸の方に右手の親指と人差し指でオーケーの輪を作って見せ、その足で中央のグランドピアノに歩み寄った。

椅子を引き蓋を開いて鍵盤を露わにすると真理は浩幸を振り返って小さく頷いて見せた。真理が浩幸に背を向ける格好で椅子に腰を下ろすと店内の人間が中央のピアノに注目しだしたのがざわめきや気配で暗がりの中でも分かる。しかし、真理の後姿からは露ほども臆する様子は窺えない。彼女はまるで自ら周囲の注目を惹きつけようとしているかのように極めてゆっくりとその細い指を鍵盤に下ろしていった。一瞬店内が無音を作り出す。誰もが固唾を呑んで彼女の指先に注目していた。

その中で真理が弾き始めたのは極度にゆっくりな「猫踏んじやつた」だった。心憎いほどのスローなテンポで奏でられる聞き慣れたメロディーに店内の緊張が瞬時に緩むのが分かった。思わず微笑んでしまうような愛らしいだまし討ちだった。聞く者をやきもきさせるほど極度にゆっくりとした調子の「猫踏んじやつた」は滑稽なよ

うでありどことなく物悲しい印象も漂っていた。弾き方一つでメロデーの雰囲気がかうも変わるものかと浩幸は感心していた。

続けて店内に流れたのはアップテンポに組み立てた「いとしのエリー」だった。思わず歌詞を口ずさみたくなくなるような気分になっているのは浩幸だけではないようだった。曲にあわせて唇を動かしたり肩を揺らしたりしている客は多く、テーブルの上で手を握り合っているカップルもいた。真理は完全に聴衆の心を掴んでいるようだった。浩幸は真理のエンターテイナーぶりに感心しつつ一観客の気分で煙草に火を点した。

「大したものね、彼女」

浩幸は自分の目を疑った。全く予想していなかった事態が眼前に発生していた。浩幸は手から滑り落ちそうになる吸い始めたばかりの煙草を慌てて持ち直し灰皿に押し付けた。

「瑠香」

状況を飲み込めず混乱している浩幸を尻目に瑠香はまるで自分の席に座るような顔つきで真理の椅子に腰を下ろしタイトなスカートから伸びた美しく長い脚を組んでみせた。咄嗟に浩幸は真理の姿を確認した。真理はすっかり堂に入っていて軽く前後に身体を揺らしながら気持ち良さそうに鍵盤を撫でている。視線を戻すと落ち着き払った顔つきの瑠香が浩幸の手元に置いていた箱から煙草を一本取り出して口に銜えテーブルのろうそくで火を点けようとしていた。

「ここで何やってるんだ、瑠香」浩幸は上ずりそうになる声を必死に押し殺して早口にまくしたてた。「一体どういつつもりなんだ？」苛立つ浩幸の気持ちを弄ぶかのように瑠香は天井に向けてゆつくりと白い煙を吐き出した。

「随分と可愛らしい方ね」瑠香は浩幸の問いを完全に無視していた。「あなたが夢中になるのも納得だわ」

真理の「いとしのエリー」は終わりに近づいている。今ここで真理に見つからないように強引に瑠香を去らせることは不可能なようだった。浩幸は精一杯のいかめしい表情で瑠香を睨みつけた。しか

し瑠香は全く意に介さない様子で煙草を燻らしながらピアノの旋律に聞き入っている。

浩幸は瞬間的に覚悟を決めた。真理には瑠香を会社の部下として紹介しよう。部署は違えど職制上瑠香より浩幸は上位にいるので嘘偽りは無い。後は瑠香に口を挟む隙を与えずに瑠香を去らせるか或いは真理と二人で店を出れば良い。瑠香の出方次第では真理に少々疑念を抱かせることになるかもしれないが、恐れるほどのものではない。真理は所詮良家のお嬢様だ。店を出たあとでいくらでも言いくるめられるだろう。もし最悪の場合として瑠香との仲がばれたとしても過去の女だと説明すれば桜井なら一笑に付して終わりだろう。何とでもなる。浩幸は弾き出した分析結果に満足し椅子に深くゆったりと座りなおした。心の中ではいつでも席を立てるように身構えている。真理と瑠香を左右の目で捉えつつ浩幸はその時を待った。まもなく「いとしのエリー」は終わった。どこからともなく拍手が起こりやがて店中に広がった。自棄になったように浩幸も一際大きく手を叩いた。瑠香は相変わらず涼しい顔で煙草の煙を浩幸の横顔に吹きかけてきた。

真理は椅子に座ったまま小さく一つ頭を下げると浩幸を振り返ることなく再び鍵盤に指を這わせていった。流れ出したのは浩幸の知らない軽やかなジャズだった。リズムカルな旋律なのだがどこことなくしつとりとした雰囲気曲だった。

「楽器が弾ける人って羨ましいわ」

ぼんやりと真理の背中に視線を投げかけている瑠香も半ば真理の奏でる調べに心を奪われているようだった。

浩幸は真理がこちらを振り向くことなく次の曲を始めたことで少し落ち着きを取り戻し新たな煙草に火を点けた。

瑠香の狙いが分からなかった。ここで会ったことを偶然と考えるにはいささか無理がある気がする。しかし瑠香は先日「上手くやるから」と言っただけ浩幸に關係の継続をねだってきたばかりだ。浩幸と真理との仲を妬んでの行動なら愚かすぎる。こんなことをされれば

余計に浩幸の気持ちから離れていくのは必定だった。別れのきっかけにはなっても復縁につながる要素にはなりえない。暗闇の天井に向かって煙を大きく吐き出すと浩幸は冷静な口調でもう一度瑠香に問いかけた。

「どういつつもりなんだ？」

「安心して」瑠香は灰皿に煙草を押し付けると気味の悪いほど優しく浩幸に微笑みかけてきた。「私はあなたの忠実な奴隷よ」

「奴隷？」

「そう。奴隷はご主人様のために働くの」

瑠香は意味ありげに深く頷くと足組みをほどきいきなり立ち上がった。揺らめくろうそくの炎では瑠香の顔色が全く読めない。

「二人は血が繋がってないの」

そう言い残すと瑠香は浩幸の脇を通り過ぎその背後に消えていった。

血が繋がっていない？浩幸が瑠香の背を追って慌てて振り返るとぼんやりとした暗がりの中で瑠香が誰かに腕を？まれているのが見えた。

誰だよ、あの男。

誰だつていいじゃない。

いいわけないだろ、説明しろよ。

うるさいわね、もうつきまとわないで。

何だよそれ、どういう意味だよ。

そのままの意味よ。

一組のカップルとは言えなくなった男女が弱々しいろうそくの灯りに影を揺らしながら店の外に消えていった。真理が弾くジャズの調べが一層哀切に響き二人の情景が映画のワンシーンのように見えた。

その様子を最後まで確認して浩幸は瑠香がここにいたのは奇跡的な偶然だったのかもしれないと思った。しかし、彼女が残した言葉の意味が分からない。一体誰と誰が血が繋がっていないというのだ

ろうか。

やがて真理の指は激しく踊りクライマックスを迎えて曲は終わった。真理が小さく息を漏らすと店内からは一斉に拍手が湧き起り口笛が飛んだ。真理は周囲の反響に驚いたように手で口元を覆い立ち上がると右へ左へと一度ずつ頭を下げ、小走りで浩幸のもとに戻ってきた。それでも拍手は鳴り止まず真理はもう一度フロアの中央に向かつて深々と一礼せざるを得なかった。

「恥ずかしいわ、どうしよう」真理はろうそくの灯りでも分かるほど頬を上気させ肩で息をしていた。「バイトしてたときも弾くのはいつも店を開ける前か跳ねたあとでお客さんがいるときにピアノに触れたことなんて一度もなかったのよ」

「そうなの？それにしては堂に入ってたよ。見事な腕前だった」

浩幸が誉めると真理はさらに首筋から顔までを赤らめ、本当に嬉しそくに笑って見せた。

「失礼します」

見上げるとマスターが立っていて素早く浩幸の前の灰皿を交換した。片付けられる灰皿の中が横目にちらりと見えた。吸殻が三本。そのうちの一本には見事に赤い口紅が付いていて浩幸の心臓が一度大きく跳ね上がった。紛れもなく溜香の残していったものだった。浩幸はもう一度マスターの顔を見上げた。

「真理ちゃん、腕を上げたね」

「ありがとう。マスターに誉められるなんて嬉しいわ」

マスターは真理に見せていた優しい微笑をそのまま眉一つ動かさずに浩幸の方に向けた。

「何かご注文の方はよろしいですか？真理ちゃんへのギャラとしてサービスさせていただきますよ」

マスターが灰皿を交換に来たのは偶然ではないだろう。彼は溜香のことを見ていたに違いないと浩幸は思った。素早く灰皿を取り替えたのは浩幸の女性関係を咎めるつもりなのか、真理から悲しみを遠ざけたいためなのか。いくらマスターの顔色を窺ってもただ柔和

な笑顔を浮かべているだけでその奥に何も見出すことはできなかつた。真理は今自分が座っている席を先ほどまで占領していた他の女の匂いを嗅ぎつけただろうか。

「じゃあ、今日の記念にマスターのお勧めのカクテルを」

「私も。マスター、お願い」

真理は吸殻には気付いていないようだった。頬の赤らみも落ち着き、いつもの華やかな笑顔が戻っている。

「かしこまりました。暫くお待ちを」

マスターが戻っていくと真理は浩幸にいくつも質問を浴びせてきた。家と職場とでは父の印象は違うか。真理とママが料理を作っているときに父とは何を話していたのか。今日の料理の味付けはどうだったか。

浩幸は煙草を吸いつつ適当に当たり障りのない応対をしながら頭の中では溜香の「血が繋がっていない」を様々な角度から眺めていた。

気がつくともカウンターからマスターがカクテルグラスを二つ運んでくるのが見えた。どきつとするほど鮮やかな紅色のカクテルだった。

浩幸は無意識にボールペンを指で回していた。学生時代からの考え事をするときの癖だった。この数日というもの降って湧いたように突然考えごとが浩幸の中で増えた。つい先日までは真理のことだけを一心不乱に想っているだけだったのだが、今は答えの見つからない難題に思考を乱され気がつけば仕事が全然手についていないということが繰り返されていた。

自分は今誰を愛しているのか。

まずこの問いを突き詰めていくとやはり石川先生という名前を挙げざるを得ない。この気持ちに嘘はない。もちろん真理のことを嫌いになったわけではない。彼女は母親譲りの美貌は言うまでもないが、男勝りの肝の据わった性格でありながら時にその仕草や表情には愛嬌たっぷりのところがあり万人に愛される非常に魅力的な女性である。しかし、石川先生と再会するまでの真理へのあの全てを押し流してしまうような激しい思いは嘘のように鎮まっていた。

だとしてこれからどうすれば良いのか。石川先生への募る気持ちと真理に対する罪の意識に正直になるなら真理との結婚は白紙に戻してもらうしかない。しかし、その告白の代償はあまりに大きい。社長候補の桜井の顔に泥を塗るのだ。出世どころか、大げさではなく職をも捨てる覚悟が必要だろう。そしてその後何が残るのか。石川先生が桜井の妻である現実は変えようがない。真理との結婚を反故にした男を石川先生はどのような目で見るのか。娘の人生を乱した男から愛を告げられたところで、彼女が全てを捨てて胸に飛び込んできてくれる確率は万に一つもないだろう。つまり真理と一緒に自分の将来を放棄してその果てに手にするのは心の平穏だけということになる。しかも華やかな出世と石川先生への道を自ら閉ざして本当に精神的に安定を保つことができるのかは甚だ疑問だ。罪悪感を忘れても苦い後悔を噛みしめることにはなるだけではあるまい

か。だとすればやはり真理と結婚して桜井とともに栄達を味わう方が実があるというものだ。

いくら考えても結局はその結論に至るのだが浩幸はそれを飲み込んで受け入れることにどうしても抵抗があった。浩幸は回っていたボールペンを力を込めて握りしめた。机の上に投げつけたい衝動に駆られる。このまま自分の気持ちは押し殺したまま一生嘘をつき続けて最愛の人の娘とともに暮らしていくしかないのか。そんな偽りの行方に幸せが待っているのだろうか。

浩幸は力なく息をついた。全てが順調に回っていると思えた時間は本当に束の間だった。石川先生の姿を再び目にする事ができた。それだけで満足しなくてはいけないのかもしれない。そのことに浩幸は自分の人生の全ての運を使い果たしてしまったような気持ちになっっていた。

血が繋がっていない。瑠香はそう言ったと思うが、言葉が言葉だけに浩幸は自分の耳に一抹の疑念を抱いていた。肝心の瑠香は今日仕事を休んでいる。瑠香の隣の席に座っている名前も知らない若い女性職員に尋ねてみると「風邪らしいですよ」と間延びした返事を頂戴した。

瑠香は今職員の給与事務を扱う部署にいる。従って全職員の給与及び福利厚生に関するデータを誰にも怪しまれず見ることができるところには職員だけではなくその家族のプライベートなデータが含まれているはずだ。彼女なら職員の家族について血の繋がりの有無などを調べるのは造作のないことだろう。そして瑠香が言った「お二人」が誰と誰を指しているかは明白だ。外見から見て真由美と真理が実の母子であることに疑いはない。とすればありえるのは桜井と真理の二人の関係だ。

仮に瑠香の言葉が事実だったとして、真理と桜井の間にDNAの関連がないのは確かに意外だが、だからと言ってそのことが特に目を見張るようなトップシークレットというようにも浩幸には思えなかった。各家庭にはそれぞれそれなりの事情がある。離婚は今や何

の珍しさもないごくありふれた社会現象だ。その分再婚する人も多いだろう。桜井が他人の子である真理のことも含めて真由美を愛し、そして真理と本当の親子以上に仲の良い関係を築いているということになればそれは正に美談である。また浩幸の中で桜井の男としての株が一枚も二枚も上がることにはなるが、瑠香の狙いがそこにあるとは思えない。瑠香が言いたかったのはどうということなのか。浩幸は左手で頭を掻き右手で再び素早くペンを回し始めた。

浩幸の机の電話が鳴った。

「営業開発係、村瀬です」

「浩幸さん？私。真理だよ」

浩幸は思わず言葉に詰まった。オフィスの電話は外線と内線でコール音が違う。今回は確かに内線電話だった。それは真理が今社内にいることを意味する。どこから掛けているかは大よその察しはついた。部長室から間違いないだろう。彼女が内線電話を使える場所には他にはない。

「驚いた？今、父の部屋にいるの。部長室って豪勢なのね。びっくりしちゃった。今、父に換わるね」

公私混同だ、と浩幸は思った。こんな電話をもらっても困るだけだった。これがたとえ社外からの電話だったとしても恋人からだと思われたら部下に対しては示しがつかず、同僚や上司からは常識を疑われることになるだろう。緊急なら携帯電話に掛けてこれば良いのだ。浩幸は勤務時間中の人間に私的な電話をする真理にがっかりしていた。父親が実力者だからとは言え、少し行動が軽はずみではないか。

桜井も桜井だ。何らかの事情があつて娘を会社に呼ぶというのはありえない話ではないだろう。しかしその愛娘が勤務中の部下に電話をするのを止めないのは仕事というものをないがしろにする行為であり、大きく見れば部長のために働いているとも言える浩幸に対しての侮辱でもある。

浩幸は実に不愉快だった。桜井親子に茶化され笑いものにされた

気分だった。

「村瀬君、申し訳ない。少し席を外した隙に真理が遊び半分で電話を掛けてしまったようだ」電話を換わる前に受話器の向こうで真理を叱りつけた桜井の声がした。「真理はろくに社会で働いたことがないんだ。職場というところがどういうところか分かっていない。気を悪くしただろう。私に免じて許してやってくれ」

「いえ、気にしておりませんから」

どうやら真理が桜井の目を盗んで勝手に掛けてきたようだった。さすがに桜井は長年営業の第一線で汗を流してきた経歴の持ち主だけに仕事というものがいかに私事となじまないかを熟知している。部下に対しても真摯に詫げるその姿勢に浩幸は溜飲が下がる思いがした。

平静を取り戻せば真理の行為もどうということはないように思える。悪気はなかったのだろう。声が聞きたかったというのなら憎めない話でもある。

昼休みになったら部長室に来てもらえないか、という部長の言葉に従って浩幸はいつもの幾分なじみが出てきた木目調のドアをノックした。中から桜井の声で返事が返ってくる。ドアを開いて部屋に入るとそこには桜井親子が並んでソファに座っていた。

「さっきのことはきつく叱っておいたから許してやってくれないか」桜井はにこやかに言ったが隣の真理はかなりの大目玉を食らったのを見るからに悄然とした様子で肩を落として座っていた。桜井部長のあの鋭い眼光で睨まれたらそれなりに肝の据わった男でも血の気がひいてしまう。浩幸は俯いたまま黙り込んでいる真理を見て少し不憫になった。「これも反省しているようだから」と桜井に頭を撫でられて真理は漸く口を開いた。

「すいませんでした」

浩幸に許してもらえないとも思っているのだろうか。真理は一向に顔を上げようとはせずますます身を小さくしてうなだれている。「本当に気にしていませんから」

浩幸がそう言うのと真理は覗き見るような視線で浩幸の表情を窺い、また目を伏せた。「良かったな」ともう一度桜井が頭を撫でると真理の頬から光るものが伝って落ちた。

「馬鹿。泣く奴があるか」

慌てる様子もなく桜井は「困った奴だ」と背広のポケットからグレーのハンカチを取り出し真理に差し出した。桜井は女性にハンカチを差し出す仕草が絵になる男だった。おずおずと受け取ると真理は大きく鼻をすすってハンカチを目に押し当てた。

親子だ。

誰がどう見ても完璧な親子の絵だった。厳格さの中にも優しさを垣間見せる父親と淑やかながらも甘えん坊で泣き虫のひとり娘。この二人が血が繋がっていないなどと誰が信じようか。やはり俺が聞き間違えたのかもしれない。実際に耳にしたはずの言葉を疑わずにはいられないほど二人のやり取りは自然だった。

「ところで村瀬君。昼はいつも何を食べている？」

「はあ。いつもはコンビニのサンドイッチか食堂の麺類ですが」

「そんなことだろうと思ったよ。それでは栄養が足りないな」

「ええ、まあ」

浩幸が恐縮すると桜井は満足そうに頷いた。

「今日真理が来たのはあれなんだよ」桜井は後ろを振り返って背後の机の上に乗っている紙袋を指差した。「私はここで食べるから、村瀬君、迷惑じゃなかったら公園にでも行って真理の作った弁当を食べてやってくれないか」

「迷惑だなんてとんでもない」浩幸は慌てて首を振った。「ありがたいです」

実際はありがたいなどという気持ちはなかった。公園で他人に見せびらかすように幸せぶって弁当をつつくなんて。浩幸は考えただけでも寒気がするようだった。知人に見られたらいい笑いのものにされてしまう。浩幸の頭の中には桜井が口にして自分が否定した「迷惑」という二文字しかなかった。それでもエレベーターホールへ続

く廊下をまだ泣きべそをかきながらも何となく嬉しそうに弁当を持って後ろについてくる真理がいじらしいと思わないではなかった。

「一人で作ったの？」

「ママに手伝ってもらって」

真理は初めて顔を上げひつくひつくとしゃくりあげながらも微笑んで見せた。しかし浩幸は真理の表情を見ていなかった。目はそちらに向けていたが実際に見ていたのは真理の母親が台所で弁当を詰めている姿だった。石川先生が作ってくれた。それだけで浩幸は胸が一杯になるようだった。

「お母さんは料理も上手なの？」

「うん。大層な料理は作れないんだけどお弁当を作らせたらかなりの腕前なのよ。ママに作ってもらったお弁当のふたを開けるのが小さい頃の真理の楽しみだったの」

外は少し肌寒かった。ここのとこめつきり秋めいてきて雲の間から届く日差しはじれたいほど弱々しく、赤みを帯び始めた街路樹の葉が時折撫でるように吹く風にかさかさ音を立てながら揺れている。

会社のそばにある公園はどこからでも水の流が見えるように設計しており、絶えずゆらゆらと清涼な音が聞こえてくる。中央には大きな噴水があり、その周囲にはサラリーマンやOLの影がちらほら見える。その中には浩幸の会社の人間もいるかもしれない。浩幸は足元に目を落として噴水を大きく迂回し早足で公園の脇にあるポプラ並木の歩道に出た。背の高いポプラのために日差しが届かないせいか歩道に等間隔に備え付けてあるベンチには人影がまばらだった。子犬を膝に乗せ置物のようにじっと目を閉じて佇んでいる初老の女性、くしゃくしゃの新聞を寝転がりながら読む浮浪者風の男、ぶつぶつとひとりごちながらうなだれている中年のサラリーマン。

浩幸が空のベンチに腰を下ろすと真理は手にしていた淡いベージュのストールを肩に羽織り浩幸の隣にぴったりと寄り添うように座った。

「美味しくなかったら遠慮せずに残してね」

恥ずかしそうにおずおずと真理が差し出した四角い包みにはサンドイッチが詰められていた。

「浩幸さんの嫌いなものが分からなくて、サンドイッチなら無難かなってママと相談したの」

浩幸は石川先生がサンドイッチを作っている姿を想像した。あの白い手で食パンを切り、きゅうりを切り、ハムを切る。最愛の人が俺のために俺のことを想って作ってくれた。その空想だけで胸が熱くなるほど幸せだった。浩幸には真理が口に合うか不安な表情を浮かべてこちらを注視していることなど全く気付いていなかった。一心不乱に愛する人の想いを口に詰め込んだ。

「はい、どうぞ」

全てのものを口の中に押し込んだときに浩幸は初めて顔の横に湯気の立ち上るコーヒーを見つけた。一瞬白い蒸気の向こうにいるのが石川先生に見えて浩幸は思いがけず強く息を吸い込んでしまい、その拍子にパンの欠片か何かが咽喉に詰まって激しくむせかえった。「ちょっと、大丈夫？」

真理が慌てて浩幸にコーヒーを飲ませ、背中をさすってくれる。

コーヒーが熱くて猫舌の浩幸には手強かったが咽喉に引っかかったものを何とか流し込んで漸くしつかりと真理の顔を見た。

「ありがとう。死ぬかと思ったよ」

礼を言うつと真理はほっとしたように息をつき「あんな勢いで食べるから」とくすつと笑った。

浩幸はその真理の笑顔を素直に可愛いと想った。しかし一つの答えが嫌でも浩幸の頭に浮かぶ。

真理のことを愛していない。

同じダイヤモンドでもそれぞれ価値に雲泥の差があるように真理と石川先生との間には決定的な違いがある。真理の母親が石川先生だと知って以降、浩幸は真理のことを石川先生に繋がる存在としか意識できなくなっていた。思い返せば最初から初恋の人の代わりと

して接していたのかも知れない。真理をそのまま真理として見たことがなかったということだ。そしておそらくこれからもないだろう。浩幸は石川先生との接点として利用するための材料としてしか真理を見ることができなくなっている自分に気付いていた。そんな偽物の愛でこれから先真理を満足させ続けることができるのだろうか。浩幸は真理に気づかれないようにこっそりため息をついた。しかし胸にはびこる真理への後ろめたさは少しも軽くはならなかった。

真由美はぼんやりとピアノに向かって座っていた。落ち着いて考え事するのは決まってピアノの前だ。そしていくら考えても答えが出ないときは鍵盤の上に手を置いてみる。すると決まって思考回路の渋滞とは対照的に真由美の奔放な指先はまるでそこに意思があるかのように勝手に踊り出し好きなベートーベンのメロディーを軽やかに奏でていくのだ。今日指が選んだのは「テンペスト」だった。アレグレットのリズムが知らず知らずのうちに真由美の心を無にしていく。そう、ただひたすらピアノにだけ集中していれば何も考えなくて済む。いくら考えたって仕方のないことなのだから。でも苦しい。

真由美は突然指を止めると腕を振り上げ両の掌を思い切り鍵盤に叩き付けた。周囲の壁や窓が砕け散ってしまいそうな勢いで破壊的な音が鳴り響く。そのままの勢いで鍵盤の上に突っ伏すと真由美は息苦しさで激しく肩を上下させて掻き集めるように空気を肺に取り込んだ。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。幸せだった生活の崩落の始まりはいつだったのだろう。また昨夜のドアの向こうからの聞きたくなくても漏れ聞こえてくる声と音が真由美の耳に繰り返される。

夫と寝室を別にするようになったのは5年ほど前からだった。原因は真由美の不眠症だった。真由美はもともと寝つきが良い方ではなかった。身体が芯まで疲れきっていたり、翌日が早く起きなくてはいけない日だったりすると目を閉じていればいるほど妙に目が冴えてきてしまい、いつまでもベッドの中でもぞもぞと寝返りを打っているということがしばしばあったのだが、ある日突然眠り方を忘れてしまったように眠れなくなり、ようやく寝付いても二、三時間で目が覚めてしまいその後は朝まで寝付くことができなくなったり

するようになってしまった。

夫はそんな真由美に冷たく接したりはしなかった。真由美が眠くなるまでおしゃべりにつきあってくれたり、眠気を誘うという足裏のつばを刺激してくれたり、真由美が深夜に目を覚ますとそれに敏感に気付いて手を握ってくれたり肩を抱いてくれたりした。しかしその夫の優しさが次第に真由美にはつらくなっていった。妻がどうであれ布団に入ったらすぐ寝付き、ちよつとやそつとのことでは目を覚まさないほど深く眠れる夫だったら真由美も気が楽だったかもしれない。だが彼は献身的な性格だった。自分が隣で寝ていては夜遅くまで仕事をして疲れているはずの夫を深夜に起こしてしまう。寝付けずに何度も寝返りを繰り返しては夫の疲れが癒されない。「気にするな。仕方ないことじゃないか」と彼は言ってくれたし、眠れなくても愛する人の温度を感じているだけで十二分に幸せではあった。でも、せめて夫だけでもぐつすり眠って次の日に疲れが残らないようにしてほしい。真由美は身を切るような想いで夫の布団から脱け出したのだった。

異変に気付いたのは半年ほど前だった。その夜も真由美は寝つきが悪かった。二時ごろになって咽喉の渴きを覚えキッチンに向かい水を飲んで部屋に戻ろうと夫の部屋の前を横切ったとき中から娘の真理の声が聞こえてきた気がした。

真理と夫は血が繋がっていない。真理は真由美の連れ子だった。真理の父の父親はいわゆる遊び人だった。今振り返ってみれば彼にとつて私は何人かのうちの一人だったのだからと真由美は思う。子供が出来たの、と告げた真由美に彼は即座に「墮ろせ」と映画の中でも見たことのないような冷たい目で言い放った。真由美はお腹の中の命を凍らせるようなそのおぞましい視線に恐怖を感じ音楽教師の仕事を辞め借りていた部屋を引き払って逃げるように彼の前から姿を消したのだった。

今の夫とは十年前、真理が中学生のときに結婚した。彼はいわゆるバツイチで再婚という引け目を感じていたのかもしれないが中学

生の真理を含めて真由美の全てを受け入れると言ってくれた。実際に新しい家族3人で一つ屋根の下で暮らし始めても夫は他人の子である真理をすげなくあしらったり暴力を振るったりすることは一切なかった。優しくというよりは丁寧に接してくれていたと思う。しかしいくらできた人間でも夫には心の中では知らない男の娘という思いがあるだろうし、真理にも突然現れた知らない大人の男性に遠慮や戸惑いがあり完全に心を開くことはなかなかできないだろう。それが夫にとっては妻であり、娘にとっては実母である真由美を抜きにして二人つきりで打ち解け話し合っているということは真由美にとっては嬉しい事実だった。いつからそんなに仲良くなったのだろう。真理が何か相談事をしているのだろうか。それとも夫が真理の興味や視点を若い女性の意見として参考にでもしているのだろうか。真由美は胸の奥に温かいものが流れるのを感じながらそつとドアに聞き耳を立てた。

「パパのこれって硬くって気持ちいいね」

真由美の心が一瞬にして凍りついた。娘は今何と言ったのか。いや、何かの間違いだ。そんなはずはない。

「真理の身体も瑞々しくて素敵だよ」

真由美の中で何かがはちぎれた。突然膝から下の感覚を失い身体と精神が液状化して流されていきそうになる感覚に襲われた。悪夢だ。これは悪い夢に違いない。目に映る世界がみるみる色を失い胃の底から身体全体を揺さぶるような吐き気がこみ上げてくる。この世界で唯一の安息の地である3メートルと離れていない自分の部屋に真由美は逃げるようにして重い足を運んだ。背中から娘と夫の甘ったるい乳練り合う話し声が残忍な落武者狩りのように真由美を追いかけてくる。真由美はやっとの思いでドアを開くと死地に取り残された敗残兵さながらその場に膝を落として這いつくばりもう二度と起き上がるまいと自分の境遇をただ呪うだけだった。

あれから半年。

夫と娘は禁断の関係から抜け出そうとすることでどこか逆に自分たち

からその泥沼の深みにはまり込むように夜毎お互いの部屋に忍びあ  
い過去も未来もない世界で眼前の快樂に溺れ房事に耽っていること  
を真由美は知っている。そして朝になれば何事もなかったかのよう  
にいつもどおり、夫は愛妻家で有能なサラリーマンの仮面をかぶっ  
て新聞を読み、真理は良家の育ちを思わせるような淑やかな身のこ  
なしで進んで母親の手伝いをするのだ。この二人には人間の血が通  
っていないのだろうか。そうでなければこんなに平然と私の前に姿  
を見せられるわけがない。特に真理は自分が腹を痛めて産んだ娘だ。  
女とはかくも簡単に実の母親を裏切ることができるものだろうか。  
真由美はただただ夜と朝の顔を完全に使い分ける同居人に驚き心を  
凍らせるだけだった。

しかし真由美もこの半年間指を銜えて二人の裏切り行為に手をこ  
まねいたわけではない。もちろんまず離婚を考えた。もう夫の顔な  
ど汚らわしいと思うだけで見たくもなかった。しかし真由美が夫と  
離婚しても真理は彼の下に残ると言うかもしれない。実の娘を他人  
の家に置いて自分だけが実家に戻り、或いは一人暮らしを始めたと  
して年老いた父や母に一体何と言えいいのか。虫も殺さないよう  
な顔をして平気で実の母を裏切る得体の知れない女だがそれでも血  
の繋がったただ一人の娘であることは否定できないのだ。

真理を産むことに真由美の両親は当然大反対だった。それこそ氣  
が狂ったように毎日毎日真由美に中絶を迫った。真由美は包丁を持  
って相手の男を殺しに行つてくると息巻く父をすぎるようにして止  
め、世間にどんな顔をすればと泣き喚く母に何度も何度も土下座し  
て謝った。それでも彼女は出産を選択した。自分の身体の中に息づ  
いている新しい命を殺すことが自分が殺されることよりも怖かった  
からだ。何かに取り付かれたように真由美は自分の体内で蠢くまだ  
名前もない我が子を身体を張って守った。やがて真由美の下腹の膨  
らみが服の上からでも分かるようになったとき両親は疲れきった顔  
で真由美に新しいマンションの鍵を渡し金は送ってやるから出て行  
けと告げた。真由美はいつの日か孫の顔に微笑んでくれる両親が見

られることだけを信じて真理を産んだ。そして真由美が願ったとおり、成長していく孫の姿に両親は徐々に生氣を取り戻していった。そして桜井に望まれての結婚。ここ数年でようやく両親は昔の穏やかな笑顔を見せるようになった。

両親は子持ちの厄介娘を娶ってくれた桜井に感謝し、真由美が桜井に愛されていると信じている。そして真理にとって桜井が理想の父親だと確信しているのだ。娘と孫の幸せだけを願っている両親に実の娘に夫を寝取られて帰ってきたなどとは口が裂けても言えるはずがない。今の真由美がおかれている状況を知ったら間違いなく両親はあまりの苦悶に耐え切れずその心臓は張り裂け彼らは血を吐いて死ぬことになるだろう。老齡の両親にもうこれ以上心労はかけられなかった。

離婚という選択肢を真つ先に捨てて真由美は桜井家で生き残る術をそれこそ必死に考えた。お願いだからやめてくれと泣きついたからといって終わるような関係ではない。彼らは睦みあいながら一つ屋根の下に頭まですっぽりと布団をかぶってうずくまっている真由美の存在を忘れてしまったかのようにあけすけに歓喜の声をあげることもある。真由美に他に行き場がないことを知っている証拠だった。

この家で生きていくには……。

夫の家である以上彼を追い出すわけにはいかない。となれば選択肢はなかった。真理をこの家から出すしかない。しかも表面上だけでも自発的に。真由美が生き残るにはそれしかなかった。しかしそんな方法があるだろうか。

方法は一つだけあった。真理が自分からこの家を出て、夫との関係を永遠に終わらせ世間的に疑いの眼差しを向けられず真弓が桜井家に残る方法が。それは真理の結婚だった。

真由美はまず強気な態度に出た。

「もう私たちは終わりね」

その一言にソファに座ってニュース番組を見ていた夫は顔色一つ

変えなかった。その横顔は怯むどころか微かに血色を増しとうとう来たかと言わんばかりに闘志のようなものを胸の内に燃やし始めたように見えた。振り向いてじっとこちらを見据える目にはまぶしいほどの力が漲っていてその迫力に飲み込まれそうになる。それでも真由美は耐えた。ここで踏みとどまらなければもう為す術はなくなる。

「私たちの関係が終わりって意味じゃないわよ。私も終わり、あなたも終わりってことよ」

「どういう意味だ？」

夫はまるで商談相手と折衝しているかのような眼差しでこちらの出方を窺っている。その落ち着いた態度はさすがだと認めざるをえなかった。真由美はこれ以上立っていられずL字になっているソファの端にゆっくりと腰を下ろした。平静を装ったつもりでも指先は震え、咽喉は乾き、瞳の動きが落ち着きを失い彷徨っていることが自分でも分かる。夫は負ける気がしないだろう。悔しいことだが夫の全てを知っているような地震に満ち溢れた視線に真由美は全身が金縛りにあったように身動きがとれずすくんでしまっていた。

「私はこの家を出て行くわ。理由は言わなくても分かるわよね？そして裁判よ」

「裁判？」

「私はあなたに高額な慰謝料を請求します」

一つ目の切り札を切ったつもりだった。しかしそれでも夫は微動だにしない。ただ言葉もなく続きを催促するように軽く頷いただけだった。真由美の目論見は見事に外れていた。相手は百戦錬磨だった。もう夫の目を見返すだけの覇気がなくなっていた。

「そんな目で見ないでっ！」

真由美は思わず叫んでいた。夫から溢れてくる抗しきれない圧迫感に耐え切れなくなっていたのだ。真由美は、しまったと思った。あくまで冷静さを失わないつもりだったが、もともと追い詰められ続けていた精神が極度の緊張によってショートしてしまっただよ

うだった。

「裁判で破格の慰謝料なんて期待できないと思うよ」

優しい声だった。まるで友達の悩み事に親身にアドバイスしているような、それでいて他人事のような見せ掛けの温かさに包まれた冷たい響きがあった。もう微塵も愛されていないのだと確信させるものだった。期待していたわけではないがそこにはやはり寂寥としたものがあつた。灰の奥の残り火を掻き出したようにカツと胸の奥が熱くなってやがてすぐに冷めていった。しかし夫の言葉自体は真由美が期待していたものだった。

「もちろん慰謝料なんていらぬわ」真由美は冷静さを取り戻していた。夫に愛がないと悟つて何かが吹っ切れたようだった。「私がほしいのはあなたの未来よ」

「俺の未来？」

初めて夫が訝るような響きを声に宿した。漸く見せた心の動きだった。

「そうよ。私があるあなたの私生活を法廷で暴く。愛妻家で子煩悩で有能なサラリーマンの正体が白日の下にさらされるわけよ。あなたがあくせく働いて築き上げてきたものは砂の城。私が荒波をつくつて押し流してみせるわ」

「そんなことできるわけがないだろう」

夫は女のあざとさを嘲笑うかのように口を歪めた。しかし目は笑っていない。

「できないかどうかやってみなくちゃ分からないじゃない。少なくとも」真由美は逆転の予感に身震いした。「試すだけの価値はあると思うわ」

「ちよつと待てよ」

「待つわよ。あなた次第で」

娘は意外に真由美に従順だった。いつまでもこんな関係が続くわけがないと覚悟していたような往生際のよさだった。もしかすると父親との情事も彼女にとっては遊びに過ぎないのかもしれない。真

理は夫から少なくない金額を受け取っているだろう。それは身に付けているものを見れば分かる。ろくに働きもしていない眞理があんなに華美に着飾れるはずがない。援助交際と考えてみれば継父ほど楽に付き合える相手は他にないとも言える。その眞理は大人しく母親に指定された場所に向かいそこにいた男と数時間語り次に会う約束をして帰ってくる。先日はその男を家にまで呼んだ。それなりに彼とのデートも楽しんでやっていたようだった。

眞由美もその男のことを気に入っていた。ハンサムだし礼儀正しい。そして何よりも瞳の力に惹かれた。何かをずっと思いつめているような熱い彼の目に見つめられると何故か少女の頃に戻ったように照れてしまう。彼のことを有能だと夫は評している。夫の人を見る目は確かだった。今となつては彼の言葉など何一つ信じられないがその評価は的を射ていると眞由美も信じて疑わなかった。こんな経緯でなかつたとしても、是非娘の結婚相手にと頭を下げたくなるような男だった。

しかしそれでも夫と娘の関係が終わつたわけではなかった。昨日などは台所で情交していたのだ。テーブルが軋み椅子が揺れる音がするたびに眞由美は震えながら布団を頭から被りなおした。この家では世間では禁忌と言われることが大手を振つてまかり通るようになってしまつていた。ひとつ屋根の下で暮らしている夫と娘の考えていることが分からない。彼らは一体何を目論んでいるのだろうか。電話が鳴っている。眞由美はピアノに突つ伏しながらその音を遠くに聞いていた。近頃は電話が鳴つても居留守を使っている。他人と会話をするのがひどく億劫だった。努めて平静を装うことに眞由美は空しさと疲労を感じずにはいられない。掛かってくるのが他人でなければ余計に話などしたくない。今の眞由美にとって知人に対していつもの体裁を取り繕うことはこの上なく疎ましいことだった。

電話はやがていつものように機械的な女性の声で留守電メッセージを流しだす。するとすぐに電話は切られた。大抵の人はメッセージを遺すようなことはしない。それは何故か。三人家族で誰が聞く

か分からないから遠慮するのもかもしれないが、真由美の捻じ曲がった精神では、遣すほどの用がないということは私のことを嘲笑うために掛けてきたのかもしれないと思ってしまうのだ。こんな考え方をしてしまう自分が真由美はひどく惨めだった。

また電話が鳴り出した。二度掛けてくるのはそう珍しいことではない。電話番号を押し間違えたのかもしれないと思うのだろうか。一回目は不在でももう一度は掛けてみないと諦めがつかないという性格も分からないではない。

先ほどと同じ応答メッセージが流れ出す。同じタイミングで電話が切れる。まるでデジャヴのようだった。

真由美は立ち上がった。スーパーに買い物に行くことにしたのだ。鬱然として外に出る気にもなかなかなれないのだがこれ以上は家に居たくない。本当に損な性格をしている。三度目はないだろうか、電話が鳴るたびに居留守を使っていることに真由美は少なからず罪悪感を抱いてしまうのだ。

簡単に化粧を直し財布を手にして小走りに玄関に向かうとまた電話が鳴り出した。

三度目の正直のつもりだろうか。真由美は迷った。三度掛けてくる人は珍しい。何か重要な用件なのかもしれない。両親の身に何かあったのだろうか。それとも真理？

真由美は振り返って電話に向かった。嫌な予感がする。良い知らせなどあるはずもない。真由美は受話器に手を掛けて一つ深呼吸した。もう誰に何を言われても驚くまい。胸のざわめきを懸命にこらえながら真由美はゆっくりとコードレスの受話器を上げた。

「はい、桜井です」  
「あつ」

出ると思っていなかったのだろうか、受話器の向こうの男は言葉に詰まったようだった。

聞き覚えのある声だったが真由美は思い出せなかった。ただ、嫌な予感はどこかに消えてしまっていた。

「村瀬です。何回か掛けたのですが留守だったのでいらつしやらないのかと思ってました」

娘の婚約者からだった。電話越しに夫以外の男性と声を交わすのはいつ以来だろうか。村瀬の声は凛々しく優しい。包み込むような温かさがあった。真由美は受話器を耳に当てたまま満ち足りていく気分を味わった。そしてそつと胸の痛みに耐えた。

彼は何も知らない。

もしかすると彼が一番の被害者なのかもしれないと真由美は思った。真理が村瀬のことをどう思っているのか分からないし何故桜井が彼を娘の婚約者に選んだのか定かではないが、どちらにせよ真由美は彼を利用してことになる。この結婚に裏切られることになれば彼は人生の筋道を誤ることになるかもしれない。自分の不幸をこれ以上増やさないために全く関係のない彼を地獄に落とすことになるのだろうか。真由美は彼に手をつけて詫びたい気持ちになった。「ちよつと買い物に行っておりましたので・・・。今日は真理にお会いになりました?」

「ええ。サンドイッチをいただきました。お母さんにも手伝っていたよ」

真由美は今朝のことを思い出した。村瀬のサンドイッチは真由美が真理を手伝ったのではない。真由美が全て一人で作ったのだ。

真理が用意しようとしていたのはご飯とおかずの弁当だった。真由美は真理が村瀬のために弁当を作ったのかと期待した。しかし村瀬のためのものではないことはすぐ分かった。今日の弁当の中身は油分や塩分を控え目にしたヘルシーなものだったし、真由美の夫の好きな佃煮もたくさん入っている。真理が当然の顔をしていつも継父のために使う弁当ナフキンを取り出してきてその弁当を包み始めたのを見て真由美は慌ててサンドイッチを用意したのだ。

「いえいえ、私は何もしてないんですよ。お口に合いましたか?」

「とっても美味しかったです。本当にありがとうございます」

「それはよかつたわ。ほつとしました。でも量が少なくなかつたで

すか？村瀬さんはお若いからちょっと足りないかなって思ってたんですけど」

桜井の会社に行くということは村瀬に会う確率が高い。もし会ったとして真理が父親のために弁当を用意したのに婚約者には用意していないとあつては村瀬はきつとがっかりするだろう。そう思つて真由美は真理に有無を言わず持たせたのだが、村瀬は何も知らず素直に喜んでくれたようだ。やはり騙しているという罪悪感はないが男のために弁当を作りその相手からこんな風に礼を言われれば嬉しいものだった。真由美は村瀬との会話に浮き立つような気分になった。こんなことは久しぶりだった。しかし村瀬の次の言葉は真由美の浮かれていた気持ちに冷水を浴びせた。

「折り入つてお話ししたいことがあるんですが、お時間を作つていただけませんか？」

軽やかに弾んだはずの心が一瞬にしてしなやかさを失つた。村瀬の声には有無を言わせぬ凄みがあつた。何かが起こる響きがだつた。真由美は事の重大さに身震いした。

「ばれたのだろうか。」

村瀬は真理の夫として理想的な男だつた。けちのつけようがない。しかしその有能さゆえにこの場合の真理の相手としては不資格だつたかもしれない。真由美はもつと凡庸な人間を選ぶべきだつたと思つた。今回求めていたのは何も気付かない愚昧さだつたのだ。

「ただ今さら後には退けない。」

ここで村瀬に真理との結婚を断られたら全てが終わつてしまう。それだけは何としても阻止せねばならなかつた。膝が崩れてしまいそうだった。床に座り込んでしまいそうになるのを懸命にこらえて真由美は何とか娘を想う母親を演じた。

「まあ、何でしょう？娘が何かしましたか？一人娘で甘やかせて育ててしまいましたので躰が行き届いておりません。どうか許して下さいください」

「いえいえ、真理さんは私にはもつたないぐらいの女性です。た

だ・・・コンサートのチケットが手に入ったので一緒にどうかと思  
いまして。その後少しお話を聞いていただければ」

村瀬は最近ピアノの腕前よりもその美貌と歯に衣着せぬ言動で人  
気がある若手の女性ピアノニストの名前を挙げた。

「コンサートは真理と一緒に行くのを嫌がったのかしら？」

「真理さんにはチケットのことは言っていないんです。クラシックに  
興味があるのは真理さんよりもお母さんの方だと」

「良いのかしら、私みたいな年増がご一緒して。ご迷惑じゃ」

「そんなことはありません。お母さんはいつまでも美しいです。本当  
に」

真由美は一瞬言葉を失った。何だろう、この感覚。村瀬の声はど  
こか必死だ。全身でぶつかってくるように力強く褒めてくれた。真  
由美はまるで愛の告白をされたような気持ちになっていた。あり得  
ないことだと分かっていても頬が熱くなった。

「何をおっしゃるの。こんなおばさん捕まえて」

「おばさんだなんて・・・。真由美さんはおばさんじゃありません」

村瀬の口調はさらに高ぶっていく。

浩幸に「お母さん」ではなく名前と呼ばれたことに真由美は戸惑  
いを覚えた。それは彼女に甘い震えをもたらした。

真由美の気持ちは決まっていた。村瀬が桜井家のしつらえた罫に  
気付いたようには思えなかった。とりあえず会って目を見ながら話  
を聞かないことには事が先に進まないように真由美には思えた。

「分かりました。でも真理が知ったらやきもち妬くわ」

真理が嫉妬するはずがない。しかし真由美はおどけてみせた。村  
瀬の思惑はさておき素敵と思える男に誘われたという事実が心を華  
やがせる。

「彼女には内緒ということだ」

電話を切った後に真由美はぼんやり立ち尽くして甘美な気分浸  
っていた。外で夫以外の男性と二人きりで会うなんて結婚以来初め  
てのことだ。内緒。秘密。密会。真由美は淫らな想像に酔った。

真由美を現実に取り戻すように玄関のチャイムが鳴った。

真由美は我に返って思わず淫蕩な自分の血を呪った。娘の婚約者に言い寄る自分を思い描いているなんて。これでは夫や娘と何ら変わらないではないか。自分はただ男の熱い肌に飢えているだけなのではないのだろうか。娘はただ母親からの遺伝に従っているだけなのかもしれない。

目が眩みそうになりながらもインターホンに出ると思ってもかけない人の来訪だった。

「紺野です。ご無沙汰しております」

紺野。真由美はその聞き覚えのある苗字に背筋を凍らせた。

紺野瑠香。彼女とは十年近く前に一度会ったきりだった。その後の彼女の境遇について真由美は何一つ知らない。そして知ろうともしなかった。

夫の初婚の相手に真由美は興味がなかった。そこに興味を持ったから結局は彼が今まで付き合ってきた女性全員に興味を持たなくてはいけないことになってしまつてしまうと割り切つた。真由美にとっては過去の女たちは所詮過去であり他人だと思つてにしていた。

しかし瑠香だけは違う。彼女だけは少なくとも他人ではない。彼女は夫の實の娘なのだ。そう思つて真由美は桜井と結婚する前に桜井には内緒で瑠香と連絡をとつたことがある。何を話すつもりでもなかった。ただ夫となる人の遺伝子を持った人間に一目会つておきたかつたのだ。ただそれだけだった。

瑠香は真理と三歳違いだから十年前はまだ中学生だったはずだが利発そうな瞳が印象的で十代半ばで人生の辛苦を知つていようような悲しげな影を抱いている「女性」だった。当時彼女は内面的にはもう成熟した一人の大人だったのだろう。両親の離婚が彼女を子供のままにはいさせなかつたのだろうか。

「悩み事ができたら気軽に相談してね」

能天気になんな社交辞令を口にしてしまつた真由美に瑠香は屈託のない愛想笑いを返してくれた。いつの間にか裏切られる痛みを忘れ求められて結婚することになつた愚かな女にそんな優しくしたたかな芸当のできる俊才だった。

真由美は財布を持って玄関に向かつた。瑠香を家に上げる気にはなれなかつた。夫の實の娘にだけは見せることはできない。以前桜井と名乗つていた彼女にだけは今の桜井家の中の事実を何一つ見破られたくなかつた。

彼女は何を告げに来たのだろうか。まさか十年前の言葉を思い出

して悩み事を打ち明けに来たわけでもあるまい。相談したいのは真由美の方だった。私が生きていくにはいったいどうすれば良いのか。夫の血族であり家族ではない彼女なら何か良き解決策を示してくれるかもしれない。一瞬本気でそう考えてしまい真由美は慌てて首を横に振りドアを開いた。

玄関に物静かに佇んでいる二十四歳の瑠香は目立つた美貌の持ち主だった。少し吊り気味の目元や、か細いなで肩から伝わる物悲しい雰囲気は十年前のままだったが、豊かな胸の膨らみや腰のくびれは少女時代にはなかったものだった。男を知っている。だからこそ出来上がった完璧な女の身体だと真由美は感じた。少し長めの前髪の向こうに見える表情は上手な化粧で華やかになったが相変わらず影を漂わせているのは目鼻立ちが整っていて彫りが深いからだろうか。その陰影が作り出す大人の女の色香に、真由美はもし自分が男だったら大枚をはたいてもこういう女を抱いてみたいと思うのだからと想像した。

真由美は挨拶もそこそこに瑠香を促してさっさと歩き出した。とにかく真由美の幸せを妬んでいるであろう瑠香を家から遠ざけたいそれだけだった。ここで玄関の奥にはびこっている我が身の不幸を瑠香に悟られでもしたら今なんとか自分を踏みとどまらせている女の意地のよくなものまでがしぼんでしまうと思つた。真由美は思った。彼女から嘲りや哀れみを受けることだけは耐えられない。それは生きていくために必要最小限の矜持だった。

真由美は駅前の喫茶店を選んだ。そこは全国展開しているチェーン店で、客層も幅広ければ店内の作りも広くいつも適度に賑やかなので周囲に気を遣わずに腰を据えて談笑していられるような雰囲気だった。まさか瑠香との会話が笑い話で済むとは思えなかったが周囲に気兼ねせずに話題に集中するには逆にこれぐらいの喧騒があった方が良い。

真由美はキャラメル何とかといういかにも甘そうな名前の飲み物を注文した。

真由美は疲れていた。ただでさえ寝ても覚めても辛酸だけを噛みしめる日々で心労が積み重なっているにもかかわらず突然の村瀬からの電話に瑠香の来訪と不意打ちを続けざまに二発も喰らっている。少しでも力を抜くとこの弱々しい秋の日差しにすら目が眩み倒れてしまいそうだった。普段はあまり甘いものを摂らないのだが今日に限っては咽喉にまとわりつくような粘着的な濃い甘味を身体が欲していた。

瑠香を席に待たせ彼女が注文した何の飾り気もないコーヒーをカウンスターから受け取ると真由美は颯爽と瑠香が座る窓際へ歩きだした。毛筋ほども我が身の不幸を悟られてはならない。向かい合って腰を下ろし瑠香の前にコーヒーを置くと真由美はテーブルに伏せたくなるような疲労感を奥歯で噛締めてこらえ、ようやく久闊を叙した。

「十年ぶりね。元気にしてた？お母さんは元気？」

「私はこの通りです。周りからは元気そうには見られないこともあるんですけどそれなりに健康的にやっています。母はどうなんでしょう。最近は何も会ってないからよく知りませんが、連絡がないってことは、元気な証拠だと思っってます」

そう言っただけで少し微笑んだ瑠香の目尻には女の真由美でさえもドキツとするほど色気が漂っている。吊り目の女が柔和に笑うところも愛らしいものかと思った。

雑談も程なく終わってしまった。真由美は瑠香の私生活について深く尋ねることも、自分の私生活について踏み込まれることも避けたかった。瑠香も同じ気持ちだろう。真由美が桜井と出会ったときにはすでに桜井はバツイチになっていたのも彼女との間に険悪な感情はないと思っている。しかしそれでも真由美にしてみれば瑠香は夫の前妻との間にできた唯一の血の繋がった娘であり、瑠香にしてみれば本来ならば自分の母親が座しているべき桜井の妻という立場に真由美がいるのだから、お互いに何となく距離をおきたい相手だった。その瑠香が電話ではなくわざわざ家にまで来たのだから余程の

ことがあるのだろう。今さら何の用かと真由美はそればかりが気になつて仕方なかった。

「この子は突然やってきて何を言い出すつもりなんだろう、って思つていらつしやいますよね」

「そんなこと・・・」真由美は否定しかけたが、あまりに白々しいので止めた。「思つてます」

「当然そうだと思います。何だか思い立ったら気が急いでしまつて申し訳ありませんでした」

「気になさらなくていいのよ。どうせ暇な身分ですから。話し相手ができる良かったぐらい」

確かに話し相手はほしかったが、亭主の前妻との娘というのは避けたかった。瑠香がこんな風に会いに来たのは初めてのことだった。瑠香は何か重大なことを打ち明けようとしている。

勘弁してほしい。

自分の問題だけで精一杯なのだ。他人の悩み事にアドバイスをする余裕など逆立ちしたつて生まれてはこない。

「驚かずに聞いてください」

頷いた真由美は本当に何を言われても驚かない自信があつた。この世界は何が起こるか分からない。実の娘に夫を寝取られるなどという驚天動地の真実を目の当たりにしている真由美はもう驚くという感覚自体が麻痺しているような気がするほど神経が鈍感になっている。そうでなければ真由美の精神が破綻してしまう。いや、すでに壊れてしまつているのかもしれない。だからこそ何事にも動じなくなつてしまつたのだろうか。

「今、私は父の会社に勤めています。もう3年目です」

「さもありません」と真由美は再び黙つて頷いた。

男親はとかく娘を可愛がるものだ。愛娘に対しては誰もが目の中に入れても痛くないほどの愛着振りを見せる。何歳になつても自分の娘だけは処女だと幻想を抱いている輩も多い。真由美も父親には可愛がられたと思う。だからこそ未婚の真由美が妊娠を告げたとき

の父が受けた衝撃は相当のものだったのだろう。頭に血が上った父はふらふらと倒れてしまいそのまま数日寝込んでしまったものだった。桜井だつて実の娘は可愛いだらう。今の不況の時代、瑠香のよくな美しい一人娘が就職に困っていたら自分の会社にと思ふのは当然の親心だ。

「私、村瀬さんと付き合っています」

これはさすがに軽い驚きがあつた。夫の会社に村瀬という姓の社員は複数いるかもしれない。瑠香の言う村瀬があのか村瀬とは限らない。そういう淡い希望を打ち砕く目を瑠香はしていた。口元を引き締めてこちらに挑みかかるような表情の彼女が言いたいことは明らかだつた。そして瑠香は予想通りの言葉を口にした。

「村瀬さんを私に返してください。お願いします」

真由美は後悔していた。このキャラメル何とかは甘すぎた。慣れないものを口にするところしたものだ。胃の奥から咽喉元へ胃酸が津波のように激しく押し寄せてくる。糖分が膜を張つて咽喉にまとわりつき呼吸を阻害しているような感触がある。真由美は瑠香の手元にあるコーヒーに目をやった。安物のインスタントコーヒーと色も香りも何ら変わらなさそうな陳腐な黒い液体。あれを飲めば少しは楽になるだらう。真由美は瑠香の話を聞いていなかった。或いは話を聞いたからこそ違つことに意識を向けているのかもしれない。瑠香の声が遠くに聞こえる。周りの雑音と同じくらいのポリウムでしかなかった。

「お願いします。私、本気なんです」

「冗談じゃない。」

私だつて十二分に本気なのだと思つた。真由美は思った。生きる希望を村瀬に託しているのである。これに失敗すれば本当に死んでやる。それぐらいの覚悟なのだ。彼女の本気がどれ程のものかは知らないが彼女に同情して村瀬を譲ることなどありえない。

しかし、何という因果だらうか。前妻との娘と後添えの連れ子とが同じ男性を求め合う格好になるとは。だが後戻りはできない。真

理は何としても村瀬と結婚させなくてはいけない。

「真理さんはよく会社に来て父と会ってるみたいですね。今日もお見かけしました。まったく部長室で何をしてるのかしら。・・・私が言うのも何ですけどあの仲の良さは本当の父娘以上です。気持ち悪いわ。真由美さんは一緒に暮らしていてよく平気ですね」

放心から覚めた真由美が気がついたときには瑠香は姿を消していた。カップの中身は少しも減っていない。真由美は向かいから受け皿ごと手繰り寄せ冷めてこの上なく不味いコーヒーを一息に飲み干した。

何もかもが自棄だった。もう、なるようにしかならない。必死に隠そうと最後の力を振り絞って一世一代の芝居を演じていたのに皮肉にも溜香は全てを知っているようだった。真由美が秘事の隠蔽にどれだけ奔走したとしても両手に掬った水のように隠し事はどこからか漏れてしまう。事実は少しずつ世間に知れ渡るのだろう。そして両親が知るのは時間の問題だ。真由美は全身が地面に引きずり込まれるような錯覚を覚えた。深い深い疲労感だった。全てを終わらせてしまいたい。終わらせるしかない。真由美は死ぬこと以外考えられなくなっていた。

死ぬときぐらい着飾りたい。

思えばこの半年間というものただ生きることにだけ固執していた真由美は生きる以外に何も求めていなかった。ゆつくりと湯に浸かって身体を磨き、きれいな洋服で着飾り、丁寧な化粧で艶を醸し、久しぶりに真由美は女に戻った気がした。それは死に化粧のつもりだった。女として命の終わりを華々しく輝かせたい。それだけだった。

「遅くなつてごめんなさい」

女は男を待たせるものだ。遅れても上目遣いに今にも泣き出しそうな顔で謝れば許される。それが美しい女性にのみ与えられる特権なのだ。若い頃はときどきこの力を使うことがあった。しかし真由美はもう若くはない。今もその権利を有しているか真由美は村瀬で試してみた。コンサートはすでに始まっている時間だった。

「すっぱかされたかと思いましたがよ」村瀬はほっとした顔で真由美を迎えた。「来ていただけでしたらそれでいいんです」

村瀬の顔には待たされた怒りなど微塵も感じられない。それどころか真由美に対して感謝の気持ちや表情を表している。

真由美は満足だった。自分が保っている美にまだ輝きがあること

が証明できたのだ。瑠香を虜にしているという村瀬が無邪気に喜ぶ顔を見ていると頬に血が上ってくるのが分かる。全身に熱い何かが行き渡っていく。真由美は己がほとんど内側から美しくなっていくのが実感できた。死神に魅入られたからこそその輝きだった。真由美は目の前の男を道連れにすることに決めていた。

「あら。私はコンサートを楽しみにしていたのよ。ほら、行きましょ」

真由美は村瀬を置いてさっさと会場目指して歩き出した。「待つてくださいよ」とすがるような声で村瀬が小走りに追ってくるのが気配で分かる。追いついてきた村瀬が右側に並んだとき、すかさず村瀬の腕に腕をからませて身体を寄せてやる。それで村瀬はどこか誇らしげに胸を張り顎を引いて真由美の歩幅に合わせてゆっくり歩くようになる。ホールに入ればさりげなく村瀬の斜め後ろに下がって彼に席までエスコートさせる。最小限の照明で足元も覚束ないほどの暗さの中では手を繋ぐのも自然だった。席にたどり着いて腰を下ろしても真由美は手を放さなかった。節くれたった厚い手の力強さが心地よかった。真由美は腿の上で村瀬の手を強く握り締めた。村瀬はこちらを見ることがなく心持表情を精悍に引き締めてすぐに真由美の白く細い手をしっかりと握り返してきた。少し痛みが走るほどの加減のなさが真由美をうっとりさせせる。

こんなものだ。

ここまでの一連の村瀬の動きは思惑通りだった。

真由美は二十年近く前に数ヶ月間中学校で教鞭をとっていたときのことを思い出していた。赴任した早々妊娠に気付き、父親のいない子を産み未婚の母になることを決心して教壇を降りたので音楽教師だったのはほんの数ヶ月だったがあのときの生徒たちの従順さは死んでも忘れられない。彼らは教えたことを日照りの地面にまかれた水のように即座に吸収していった。誰もが真由美の期待通りの反応を返してくれた。他の教師たちは生徒が言うことを聞かないとこぼしていたが真由美はその言葉が信じられなかった。生徒たちは皆

素直に真由美の言葉や態度に従っていた。今思えばそれは真由美の美しさに生徒たちが惹かれていたからなのだと分かる。それはちょうど今隣に座っている村瀬と同じだった。

全くコンサートどころではなかった。もともと石川先生に眞理とは結婚できないことを伝え、愛する人の姿を最後にもう一度だけ目に焼き付けたい一心だったのでコンサートなどどうでも良かったのだが、展開があまりに浩幸の想像を超えていて冷静に物事を見るということができなくなっていた。

暗闇のホールに足を踏み入れて以後自分の左手から伝わってくる温もりに浩幸はずっと集中していた。真つ直ぐにステージを向きテレビ映えすると評判の美人ピアニストの横顔に目を注ぎ両の耳を会場にこだまする旋律に傾けているつもりでも実際浩幸には何も見えていなかったし聞こえてくるのは自分の心臓の高鳴りだけだった。時々はつと我に振り返り回路が繋がったように視界がはつきりとするときがあったが、そんなときは自分の手の先にある手のあまりの白さとしなやかに驚くばかりだった。垣間見ることができたのはその指のあたりだけでステージの照明の反射で白く浮かび上がっているであろう彼女の横顔は覗くことができなかった。浩幸にはその横顔が神々しく恐れ多いものだったのだ。

やがてコンサートが終わり小雨の降る肌寒い夜の空気に触れても浩幸の身体の火照りは一向におさまらなかった。タクシーを捕まえても前もって食事の予約を取ってあるホテルの名前が出てこない。頭の中がぼうつとしてしまって焦れば焦るほど咽喉の奥で言葉が渋滞してしまうのだった。半ば迷惑そうなタクシーの運転手を前にこの寒さでも額に汗が浮かんでくる。うまく場所を伝えられない浩幸を石川先生がくすくすと笑っている。浩幸は自分の惨めさに泣き出したいような気分だった。

ホテルに着いても浩幸の心は落ち着く気配を見せなかった。ただでさえ石川先生と二人きりであることが空を歩いているような心許ない感覚であるのに、夢の中でさえ見なかった彼女との肉体的な接

触が浩幸を慌てさせている。石川先生はコンサート会場でもずつと手を握っていてくれたし、タクシーの中では肩にもたれかかってくるし、ホテルに着くとそつと腕に手を絡ませてきた。浩幸の身体は彼女に触れられている部分だけが極度に敏感になってしまっている。彼女の微かな身動きでさえ浩幸の全身に心を狂わせるような甘美な電流を流すのだった。

デイナーの席についても浩幸はろくすっぽ顔を起こすことさえできない。夜景で有名な店だというのに二人で窓の外に目をやるといふことさえ覚束なかった。それは石川先生が浩幸の真正面に座っているからだ。彼女のそばにいと浩幸は心が完全に中学時代に戻ってしまう。遠くに垣間見ていた憧れの存在が今つま先が触れ合うほどの位置にいる。浩幸は咽喉の渇きに耐えられず気がつけばワインにばかり手が伸びてしまっている。

「村瀬さん」石川先生がたしなめるように言う。「さつきからワインばかり飲んでるじゃない。食べないと悪酔いするわよ。酔っ払いは女性に嫌われるわ」

そう言われて素直にナイフとフォークに手を伸ばすのだが今日はどうもレアのステーキが美味しそうには見えなかった。肉塊にナイフを立てるたびに予想外の柔らかい感触とその切れ目からあふれ出すグロテスクな赤い肉汁に不快感がこみ上げてくるのだった。

「村瀬さん」また愛する人が名前を呼ぶ。「大人の男性なんだから黙ってばかりいないで何かお話して。真理は面白い方が好きみたいよ」

そう言われて素直に思ったことを話そうとして頭に思い浮かべるのは目の前の女性に対する好意の気持ちだけだった。他には何も考えられない。下手に口を開くとこの場で愛を告白してしまいそうで浩幸は一層口を閉ざしてしまうのだった。

「村瀬さん」想い人に名前を呼ばれるたびに浩幸は身がすくんだ。

「私の顔は全然見てくれないのね。真理の母親だからって緊張しなくたいのよ」

「違います」浩幸はそれだけはしっかりと否定した。「真理さんは関係ありません」

浩幸は石川先生の口から真理という名を聞かされることに耐えられなくなっていた。娘婿ではなく男として見てほしい。私が好きなのは真理さんではなく目の前にいるあなたです、と声に出して言いたい。

「そうね。ここに居るのは一組の男と女ですものね」

その言葉に浩幸は初めて顔を起こした。

石川先生はほんのり頬を朱に染めていた。よく見れば首筋は真っ赤でワインに酔ったことを如実に示している。白地を紅色に染めたその身体は匂い立つほど美しかった。浩幸は瞬きを忘れるほど彼女を凝視した。熱く鈍い痛みを瞼の裏に感じる。それでも浩幸は彼女を見つめ続けた。血走っているであろう眼球を酷使してでも今の彼女の華麗さを目に焼き付けたいではいらなかった。

「そんなに見ないで。皺だらけだもの。恥ずかしいわ」

「そんなことないです。とても美しい」

「それは村瀬さんが酔ってる証拠よ。こんな顔じゃ失礼ね。ちょっと化粧を直してきます」

立ち上がって歩を進めようとした膝が崩れ石川先生の身体が流れるのを見て浩幸は反射的に手を差し伸ばし彼女を支えた。

「酔ったのかしら。これぐらいのお酒で」

浩幸の鼻先から髪の毛の香りが立ち上る。あまりの馥郁とした匂いに思わず彼女を抱き締めてしまいそうになる。

「ちょっと休んでいきませんか」

そこからの記憶が飛んでしまっていた。気がつけば支えるように石川先生の肩を抱きエレベーターに乗っていた。透明のエレベーターボックスから見える夜景が遠ざかっていく。身を委ねてくる彼女の淡く紅い首筋から甘い香水の香りが立ち上ってきて浩幸はまた放心していた。

怖いぐらいに予定通りだった。我ながら自分の演技力に感心してしまう。もしかすると自分は本当に村瀬に惚れているのかもしれないと真由美は思った。愛を感じるところまではいかないまでも、少なからず好意を抱いているのは間違いないかった。自分の中に女が残っていて、その雌性が真由美の胸を高鳴らせている。しかし夫以外の男に身体を許そうとしていることに罪の意識を感じないわけでもない。この場に至っても女の性として悲しいぐらい貞淑な自分に気付けて真由美は軽く笑った。散々苦しめられてきた結果ではないか。真由美が裁判を言い出してからというもの常に不機嫌そうな顔をしている夫は先日「お前と結婚したのはただ可愛い真理を俺のものにしたかったからだ」などと口走った。その言葉が真実かどうかは分からないがここまで言われても未だにロリコン男のために操を立てようとする自分がいる。つくづく女は愚かな生き物だと思った。

支えているつもりで逆に真由美に支えられている村瀬が可愛かった。何も食わずにひたすらワインばかり飲んでいた赤ら顔の男。きつと彼はそんなに酒が強くないのだろう。閉まりなく口を開けてこちらが酔ってしまいそうなほどアルコール臭い息を吐き出しているだらしない村瀬の舌を思い切り吸ってやりたいと思う。彼の無邪気に驚く顔を想像するとエレベーターから部屋までの数歩がもどかしくなってくる。カードキーを上手く挿入できない男の不器用な手が苛々させる。真由美はこの廊下で今すぐにこの男を裸にしたい衝動に駆られた。ここまでに思わせる村瀬は心中する相手としても申し分ない。彼は夫の有能な部下であり娘のフィアンセであり溜香の恋人だ。村瀬を中心にして桜井家は回っていると言えないこともない。道連れにするなら彼以外にはありえないと真由美は思っていた。

案の定部屋に入った途端村瀬は真由美の唇を求めてきた。強引に

差し込んでくる舌に真由美は全身が総毛立つような鋭い快感を味わった。いつ以来の恍惚だろうか、もう思い出すこともできない。四肢の力を失ってその場に崩れ落ちそうになる自分を何とかこらえて真由美は胸をまさぐってくる村瀬を何とか押し離れた。

「シャワーぐらい浴びさせる余裕がなきゃだめよ。余裕があるのが男の魅力なんだから」

戻ってくるまで眠ってしまったようにね、としつこいほど注意して真由美はバスルームに入ってしまった。服を脱ぎ熱めのシャワーに打たれると興奮と快楽に働きを鈍らせていた思考回路が普段どおりの落ち着きを取り戻していった。身体の隅々に石鹸を走らせながら部屋に戻ってからの手順を頭の中で反芻する。不思議と怖いという意識はない。それよりもやっと終わるといふ解放感が身体を軽くさせる。この一週間エステに通って磨いた肌は自分で触っても心地よい。村瀬の愛撫を受ければ真由美の身体は内側から輝くことだろう。最後の瞬間を可能なまでに美を追求した自分で迎えられることが真由美には深い喜びだった。

バスローブを身に纏って部屋に戻ると村瀬は灯りも点けずぼんやりとテレビを眺めていた。真由美が近づくと村瀬は甘えん坊が母親を見つけたようにすぐに手を伸ばしてくる。幼い彼がいじらしい。

「ほら、シャワー浴びてきて。汗臭い男は嫌いよ」

村瀬は真由美の言葉に従順にバスルームへ消えていった。すれ違う瞬間に真由美は村瀬を引き止めたくなった。汗にまみれた男の体臭を胸いっぱい吸い込みたい。べたつく肌を全身にこすり付けて穢してほしい。そんな女性の欲望を真由美は拳を握り締めてじつとこらえた。

村瀬が消えていった方向から水が流れる音が聞こえてくると真由美はゆっくり動き始めた。鞆の中からピルケースを取り出す。中には小さなグレーのカプセルが二つ入っている。いつか来る日のためにとインターネットの自殺志願者サイトで知り合った自称「自殺コンサルタント」から買い求めた薬にそして間違はなく死ぬる毒薬だ。

手に入れたのは三ヶ月前だった。思えばこの半年というものの死ぬことばかり考えていた気がする。結局のところそれが一番簡単に楽になれる方法なのだ。しかしあのときは存在すら知らなかった男と一緒に死ぬことになるとは人生とは分からないものだ。真由美は縁という言葉を思い浮かべた。出会ってまだ数日しか経っていないのに今日ここで心中することになるとは、村瀬とは余程深い因縁によって繋がっているとしか思えない。

ピルケースを開きカプセルを一つ上下の唇で挟む。これを飲み込めば胃の中で三十分で溶けすぐに中の薬が体内に吸収される。

今私は現世の縁に立っている、と真由美は思った。眼下には底の見えない深い闇がぱっくりと口を開いて手招きしている。一步、いや半歩踏み出せば私は永遠に堕ちていくことになる。それでも真由美は意外に落ち着いていた。冷蔵庫からジンジャーエールを取り出し窓辺に立つ。

窓の向こうには自分が生きていた街並みが広がっていた。見渡す限り光の波という光景は圧巻だった。この灯り一つひとつに人々の生活があるのだと真由美は思った。一人ひとりは無意識にただ生活のために灯りを点しているのだがそれが結果的には芸術的な絵を作り出している。人間は美しい生き物だと実感した。人は生きているだけで素晴らしいのだ。

先ほどまで自分も向こう側にいた。

真由美は窓から離れた。死のうと決めてから生きることの尊さを認識させられることになるとは何と悲しいことだろう。あるいは死を受け入れた今だからこそ生を客観的に見つめられるのかもしれない。真由美は強く目をつぶりカーテンを閉めた。もう二度とあの世界には戻らない。

シャワーの音が途絶えすぐにドアの開く音がする。真由美は銜えていたカプセルを口の中に含んだ。プルタブを引きぐつと冷たい液体を躊躇なく飲み下した。ジンジャーエールの刺激が咽喉に心地良だけだった。

間もなく村瀬が背後から抱き締めてくる。彼の濡れた髪が頬に当たって気持ちがいい。真由美は少しのけぞりながら左手を彼の首に絡ませた。ベッド下のフットライトだけでは村瀬の表情は見えなかった。

「好きです」思いつめたような声で村瀬が言う。「真由美さんが石川先生だった頃からずっと好きです」

もう何が起きても驚かないと思っていた真由美にも村瀬の告白は衝撃だった。彼があのとときの教え子だったとは予想もしていなかった。彼の言葉を額面どおり信じれば彼は二十年以上もの間想ってくれたことになる。真由美は笑いをこらえきれなかった。こんなに素敵な死に方は他にはない。二十年経っても変わらず自分を愛してくれる男の腕の中で死ぬことに真由美は泣きそうになるぐらい幸福だった。

「何がおもしろいんですか」

怒ったように言う村瀬が愛しい。真由美はベッド脇のナイトテーブルにそっとピルケースとジンジャーエールを置き村瀬に飛び込むように抱きついてそのままベッドに押し倒した。村瀬の顔にキスの雨を降らせると村瀬は真由美を抱え込んで身体の位置を逆転させた。先ほどまでの汗と酒の臭いは消え石鹸の香りが微かに広がる。腕と足と唇を絡ませあいながら二人は何度も抱き締めあつた。

「私もあなたのこと好きよ。ねえ、ここでこうしていられることって偶然かしら、それとも必然？」

真正面に村瀬を見上げると彼はゆっくりと真由美の耳に口を寄せてきた。

「必然ですよ。僕たちがこうなるのは運命だったんです」

「・・・そうね。・・・きつとそうだね」

「泣いてるんですか？」

枯れ果てたと思っていた涙が溢れて溢れてどうしようもなかった。運命とすれば何と皮肉な運命だろうか。そして間もなくその運命も終わる。今頃胃の中で刻一刻とカプセルが溶かされているのだ。も

う思い残すことはない。後は一身に村瀬の愛撫を受けて死にたい。  
「咽喉渴いたでしょ？ジューズ飲ませてあげる」

真由美は村瀬の身体からすり抜けベッドに身を起こして座った。目の前にカプセルが入ったピルケースとジンジャーエールがある。村瀬に背を向けて真由美はカプセルを再び口に含みジンジャーエールを口腔に溜めた。振り返ると仰向けに村瀬が寝ている。真由美は村瀬の身体に覆いかぶさりゆっくりと口を口に近づける。村瀬が真由美の背に手を回してきた。

「僕はもう何もいりません。真由美さんさえ一緒にいてくれるなら死んだって構わない」

再び真由美の目に涙がこみ上げてきた。次から次へと村瀬の頬に熱い雫がこぼれる。真由美は口の中のジンジャーエールをカプセルごと咽喉の奥に押しやった。

「もう。変なこと言うから飲んじやっただじゃない。もう一回ね」

「もういいですよ。それよりも」村瀬はナイトテーブルに手を伸ばそうとする真由美を背後から抱きかかえ優しく力強くベッドにおおに向けた。真由美の上に村瀬が乗りかかってくる。「僕は会社を辞めます。だから僕と一緒に逃げてください」

村瀬はそう言っただけで真由美の乳房に唇を這わせた。まだまだ張りのある膨らみが村瀬の愛撫に反応して小刻みに揺れる。股間が熱く潤む。

「そうね。あなたとならどこへでも行けそうな気がするわ」

真由美は頭の芯が痺れてくるのを感じた。それが性的快感のためなのか溶けたカプセルから薬が漏れ出したためなのか判別できなかった。真由美はすがりつくように村瀬の頭に回っていた腕から力が抜けていくのを止めることができなくなっていた。

## それから

「なあ」

呼びかけても案の定返事はない。その白い背中にかかる髪は一本たりとも動くことはなかった。久しぶりのセックスにのめり込んでいたように見える瑠香はもうしばらくこちらの世界には戻ってこないだろう。浩幸は仕方なく枕もとの煙草に手を伸ばした。

石川先生が死んでから二年が経とうとしていた。彼女は浩幸の腕の中でいつの間にか息を失くなっていった。冷たくなっていく最愛の人を抱えて救急車を呼んだときには何もかもが遅すぎた。当然浩幸は自分が殺したのだと思った。セックスがきっかけとなって心臓麻痺を起こしたのだと。そのときの混乱を極めた頭ではそれしか考えられなかった。しかし警察は自殺と判断した。彼女の鞆から遺書が見つかり胃の中から致死性の高い薬物が検知されたのだ。遺書の内容は赤裸々だった。浩幸の思いも寄らなかつた桜井家の歪んだ家庭環境がそれによって完全に暴露された格好になった。浩幸は自分が偽装結婚のようなものに利用されかけていたことも知った。真理が誰かと結婚し家を出ていくことで夫と娘の悪夢のような関係を断ち切ってしまうおうと彼女が考えていたことがそこには書かれていた。そして夫と娘はこの計画を逆手にとって結婚を隠れ蓑に密かに関係を続けようとしていたのかもしれないとも記されていた。

それを読んでも浩幸は怒りを感じなかつた。桜井家の複雑な事情に巻き込まれなければ初恋の人と再会することもなかつたと思うからだった。偽りばかりの関係だったがその行方にあつたものは必ずしも不幸ではなかつた。

違法な薬物の出所を調べるために警察が石川先生のパソコンを押収した結果、電子メールのデータから今回服用した薬物は死ぬ三ヶ月前に購入したことが明らかになった。彼女は何ヶ月もずっと死ぬことだけを考えていたのだ。そして彼女の胃の中からは溶けきつて

いないグレーのカプセルが発見されている。もちろんカプセルの中は石川先生を死に至らしめた薬物だ。死に至るには一錠で十分だということを知らなかつたはずがない。しかし彼女は一錠目を服用した後少し時間をおいて飲む必要もない二錠目を口にいっている。浩幸は石川先生が口移しにジュースを飲ませようとしたことを思い出していた。あのとき彼女はジュースと一緒に毒薬を閉じ込めたカプセルも飲ませようとしていたのではないだろうか。その想像が浩幸に喜びをもたらした。死出の旅の連れ合いとして愛する人が選んだのが他でもない自分だったことに浩幸は救われたような気分だった。一緒に死ぬとしたら最も恨んでいる人間が最も愛している人間を選ぶだろう。そして自分が前者であることは考えにくい。石川先生の死は浩幸の心を大きく貫きいつまでも埋まることのない風穴を開けた。しかし死の瞬間に愛されていた自負が浩幸に僅かながら生きる活力を残していた。

真理はあれ以来浩幸の前に顔を見せなくなった。桜井部長も会社にはいらなくなり、あの洋風の家も引き払ってしまった。今は消息さえ知れない。

浩幸も辞表を提出した。とても桜井部長が遺したプロジェクトを進めていく気にはなれなかつたのだ。それに、生きていくには会社を辞めて暫く気ままな生活を送り気持ちをゼロにリセットする必要があつた。

漸く最近ぐうたらな生活にも嫌気が萌してきた。就職先も何とか見つかり今日初出勤だった。

この二年の間支えになつてくれたのは瑠香だった。「面倒なことは嫌いよ」が口癖だつた瑠香が毎日のように浩幸の部屋に来ては何も口にしようとしないう浩幸のために料理を作り、洗濯をし、掃除機を掛けて帰っていく。浩幸が料理に全く手をつけずに残しておいても嫌な顔一つせずにもたご飯を作っていく。浩幸が八つ当たりで怒鳴り散らしても涙を目に溜めて我慢し、次の日はいつもと同じ笑顔で現れる。さすがに少しでも食べなくては悪いと思つて一口二口食

べている間に浩幸は生活のリズムを少しずつ取り戻していった。気がつけば瑠香が来る時間を待ち侘びるようになっていた。不況で就職先がなかなか決まらなくても瑠香は励まし続けてくれた。やっこのことで働き口が見つかるかと瑠香は初めて泣いた。化粧が崩れるのも構わずに辺りを憚らず号泣した。

「なあ、瑠香」

それでも瑠香はぴくりとも動かない。事が終わってからかれこれ一時間になる。浩幸は煙草を持っていない左手で瑠香の髪を撫でた。この時間が瑠香にとって一番幸せな時間なのだろう。それは浩幸も同じだった。瑠香の幸せそうな寝顔は今最も浩幸の心を安らがせる。あと三十分もすれば瑠香も起きてくれるだろう。二年も待たせたのだ。それぐらい待たされても文句は言えない。

瑠香が起きたら尋ねたいことがある。

「結婚ってどう思う？」

瑠香は何と答えるだろうか。また興味なさそうに、結婚なんて面倒よ、と言うのだろうか。この際少しくらい面倒なことになっても彼女は許してくれるだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6253q/>

---

偽りの行方

2011年9月14日03時27分発行